



TITLE:

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋. 東方學報 1986, 58: 1-70

ISSUE DATE:

1986-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66660>

RIGHT:

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

林 巳 奈 夫

一 前言	一頁		
二 殷後期より古い時代に年代の比定できる類	三頁		
(1) 透し彫羽冠・長尾の玉鳥	三頁		
(2) 罍形玉	六頁		
(3) 石庖丁形玉器	八頁		
(4) 「玉紡輪」	九頁		
(5) 龜付腕輪	一〇頁		
(6) 骨鏃形玉器	一三頁		
(7) 玉 戈	一三頁		
(8) 玉 刀	一七頁		
(9) 大圭	一九頁		
		三	
		(10) 魚尾形付璜形玉器	二三頁
		(11) 首尾付璜形玉器	二五頁
		(12) 圓盤付器臺	三一頁
		(13) ただの器臺	三九頁
		(14) 「Ⅲ式琮」、「琮形器」	四一頁
		(15) 「Ⅰ式及びⅡ式圓箍形飾」	四四頁
		殷文化のものでないことは確かであるが	
		來源の明かでないもの	五八頁
		(1) 松綠石の鳥	五八頁
		(2) 牙飾付の戈	五八頁

一 前 言

一九七五年から七六年にかけ、河南省安陽の殷後期の都跡である殷墟で未盜掘の中型墓が發掘され、一九二八點の遺物が出た⁽¹⁾。この墓から出土した青銅器四六七點中、禮器が二二一點で銘文のあるものが一九〇點あり、うち婦好の銘を持つものが一〇九點（他に鉞が二點）で半数以上を占める所から、この墓が婦好のものであることはほぼ疑いない。婦好は殷墟の第二

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

期甲骨文によつて祭祀、軍事等の方面での活躍の知られる著名な女性の名であるが、この甲骨文の婦好をこの墓の青銅器の銘文の婦好に當てることは、青銅器の型式が年代的に適合する所から判斷して妥當であると考へる。

この婦好の墓の出土遺物の内、玉器は七五五點が數へられ、全出土遺物の數の四〇パーセント弱を占める。⁽⁵⁾これだけ多數の玉器が未盜掘の墓から發見されたのは未曾有のことである。この婦好墓出土の玉器がこの婦人の持つてゐたものの全部であつたかどうかは知る由もないが、發見されたものを見た限りで受ける印象は、よくもまあこれだけ蓄めこんだものだ、といふことである。後世の分類でいふ祭玉、瑞玉の類から佩玉、象形の置物的なもの、器物の裝飾的な部品に至るまで、種類が頗る豊富であり、中に從來知られなかつた珍しいものも少くない。それはよいとして、また大して面白くもない環とか箍形飾といったものまで、同じやうなものを幾つも持つてゐたものである。この墓の主人は餘程玉に目のなかつた人で、當時手に入れることのできるものは重複をも厭はず片端からコレクションに加へて行つたとしか考へられない。

さういふ蒐め方であるから、ここに發見されたコレクションは、婦好の生きてゐた紀元前一二〇〇年頃手に入れることのできた玉器の種類の、全部といふことはないにせよ、大きな部分をおほふものであることが想像される。この一群の玉器についてまづ確かなことは、これらは總て婦好の時代よりも年代が降らない、といふことである。一方さうかといつてこれら總てが婦好と同時代のものと言ふことはできないことに注意する必要がある。發表された報告書の圖版を少し丁寧に見てゆけば、その類の大きな比率を占める、見慣れた殷後期様式の器の中に、それと異なつた様式のものゝ混つてゐることが氣付かれる。その類の中には容易にその來源の知られるものがある。例へば殷中期即ち二里岡下層期の遺物のごときである。また簡單にはわからないが、研究してみるとその來源の明かになるものもあり、また現今の研究段階では十分明かにしかねるものもある。それらの中には時代の遡るものの他に、また同時代の、我々に未知の文化の產物もある可能性が考へられる。⁽⁸⁾

婦好墓の青銅器については研究者の間で關心が高く、議論も盛んであるが、玉器については一向に論ぜられることがない。右に注意した、婦好墓玉器中に殷後期以外の來源を持つものがあることすら注意されず、却つてそれらは總て殷後期の年代の

標準を與へるものと考へられてゐる。⁽⁹⁾後述のやうに明かに殷より古い、異質の文化に由來すると見るべき凹形玉が、夏鼐氏によつて殷後期の標本として扱はれてゐるのは、⁽¹⁰⁾この觀點が中國人研究者の通念であることを示唆するものと考へる。婦好墓出土の玉器を手にとつて觀察する機會を持たないまま、報告書の乏弱な圖版だけを頼りにこの小論を發表するのは、中國の研究者がこの婦好墓の玉器の來源の問題に注意を向け、また今まで氣がつかれないままに打ち捨てられてゐる可能性のある關係資料に關心を懷くに至ることにより、中國古代玉器の研究の深化されることを希んでのことに他ならない。

以下婦好墓發見の玉器の中から殷後期とは異つた様式を持つものを取り出し、種類別に検討してゆくことにする。

二 殷後期より古い時代に年代の比定できる類

(1) 透し彫羽冠・長尾の鳥

圖1の玉鳥が山東の典型龍山文化の玉器の特徴を持つものであることについては以前に記したことがある。⁽¹¹⁾その時に指摘したのは次のやうな點であつた。即ち、この玉鳥の翼の邊に明瞭に見られるやうな、輪廓を細い凸線で縁どる技法が典型龍山文化の玉器、例へば圖2の石庖丁形玉器の短い邊に刻まれた人頭等、この時期に特徴的な技法に通ずるものであること。翼に刻み出されてゐる、上端が鉤形になつた羽根の表現や、翼の上邊の附け根に近い所にある小さい突起が、例へば圖3の典型龍山文化の玉器の鳥と同様であること。長い葉狀の尾羽根の形が圖2の人頭の後に立つ羽根の形や、圖3の鬼神面の目の上に立つ羽根の形と全く同様であり、羽根の莖に小枝の出る點も圖2の羽根に見る特徴であること。この鳥の頭上の透し彫の羽冠は圖3と同じ鳥を刻んだ故宮博物院藏の「攫頭鳥」⁽¹²⁾その他に見出されること、等である。この考へは今日も全く變つてゐない。⁽¹³⁾

最後の羽冠の透し彫については、その後氣附いたことを附け加へておく必要があらう。次の點である。即ち、關係の資料としてまづ圖4がある。これは圖110に掲げた玉斧の紋様であるが、縦の條紋に挟まれた紋様は圖3の左圖の下部の紋様帶の中央

にある顔と近く、また最上部の紋様の角から出る植物の卷鬚状の線は、圖5の日照兩城鎮發見の典型龍山文化の石斧の刻線に見るものである。圖4のこの最上部の紋様の中央に立つてゐる屋根形要素は圖5右圖に見るものと同形であるが、その下に下向に曲つた鉤形が出る點、圖5と相違がある。然し同様な形は圖6の彫玉の下寄り中央の透し彫の中に逆さ吊りになつた形で見出される。この玉器の上部にあるのは圖3右圖に見るのと同式の典型龍山文化の鳥である。

さてこの圖4の玉斧の紋様は典型龍山文化のものといふことが知られたが、問題は最上部中央の屋根形を戴いた紋様要素の左右につづく紋様である。圖7(1)はその右半分の描き起しである。この圖にa—dで示した部分は、同圖(2)の婦好墓玉鳥の羽冠の描き起しの同じ文字で指し示した部分に對應することが知られよう。(1)は刻線で線が自由にのびてをり、(2)は硬い材料に不十分な道具で刻み出されたためにモタついてゐる、といふ點を顧慮する必要があることは言ふまでもないが。

圖7(3)は圖2に引いたフリア美術館藏の石庖丁形玉器に刻された牙飾の描き起しである。(1)(2)の曲線的表現とは相違し、曲りを成るべく押へた表現をとつてはゐるが、圖にa—eで示した部分は、やはり(1)(2)と正確に對應關係を保つてゐる。

圖7(4)は後に三七頁に記すやうに、やはり典型龍山文化に屬すると考へられる圖95下圖から描き起したものであるが、圖にa—dと指し示した所を比較すると、これが再び圖7(1)―(3)に對應する紋様であることが見出されるはずである。圖7(1)の屋根形に當る要素は圖7(4)の左端にある。以上により、圖7(2)の婦好墓の玉鳥の羽冠の表現が、典型龍山文化に獨特のものに屬することが知られたと考へる。

以上、圖1の婦好墓出土の玉鳥が山東の典型龍山文化に屬す

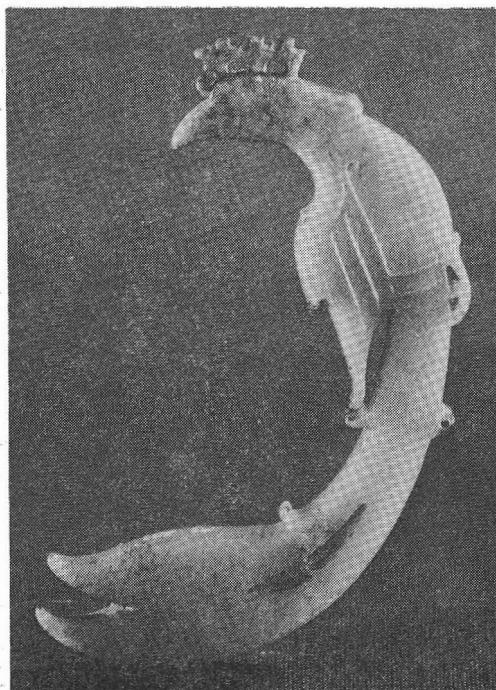


圖1 長尾の玉鳥，婦好墓，長13.6cm

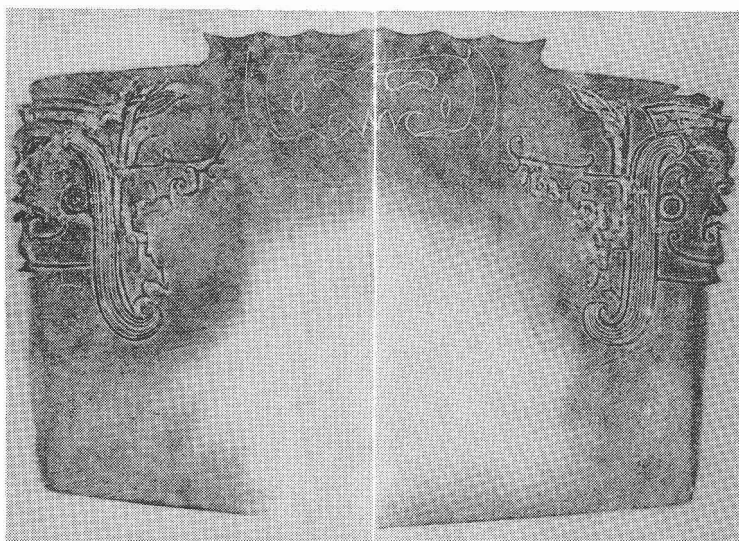


圖 2 典型龍山文化の人頭、石庖丁形玉器、Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington D.C.

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

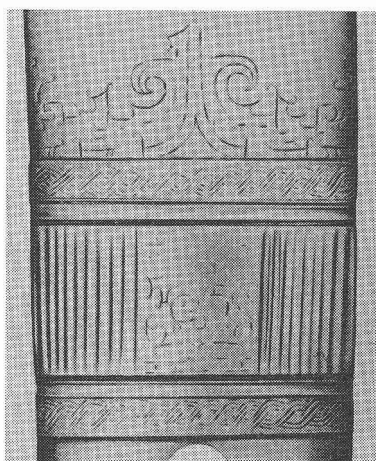


圖 4 典型龍山文化の屋根形紋様要素、玉斧

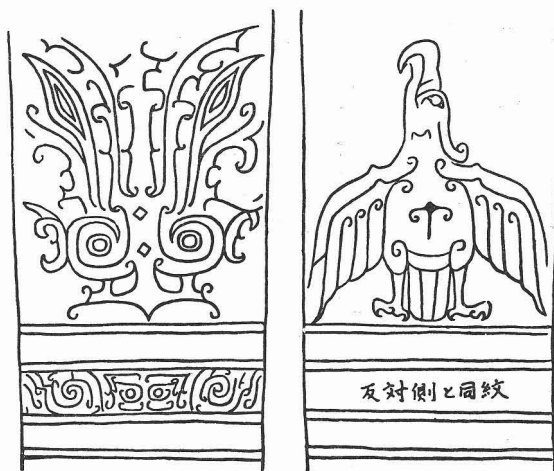


圖 3 典型龍山文化の鳥と鬼神面、王斧、國立故宮博物院

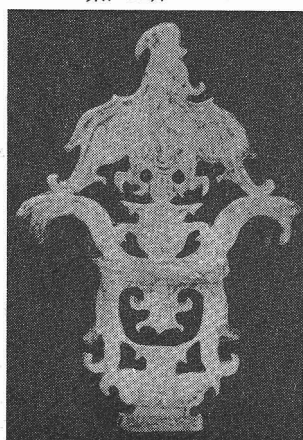


圖 6 典型龍山文化の鳥と屋根形紋様要素、玉飾、天津市藝術博物館、高 6.9cm

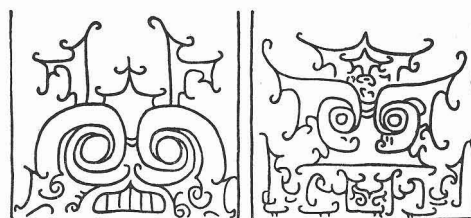


圖 5 典型龍山文化の鬼神面、石斧、日照兩城鎮

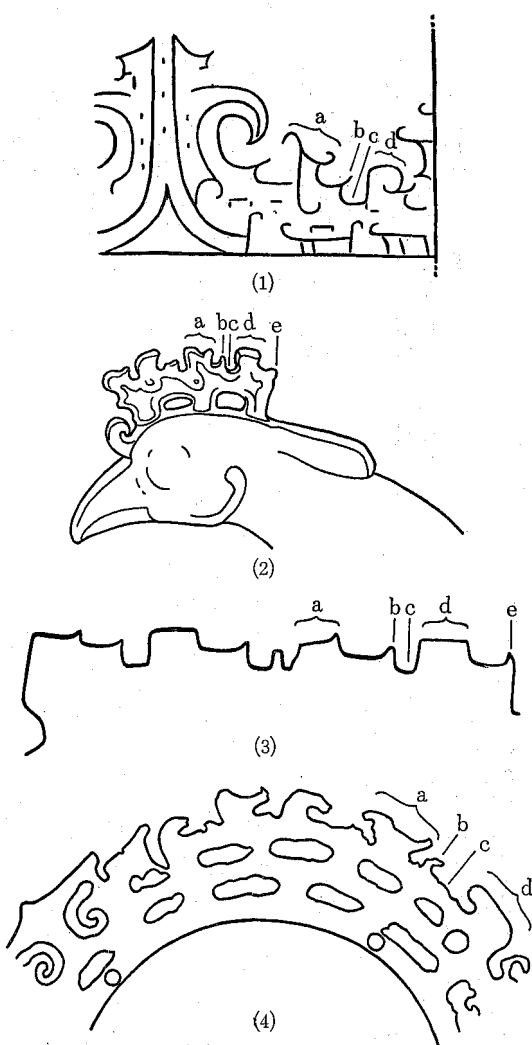


圖7 圖1玉鳥羽冠と關聯する紋様部分、(1)、圖4の部分、(2)、圖1玉鳥の羽冠、(3)、圖2の石庖丁形玉器部分、(4)、圖95玉器の部分

るものであることは明かと考へる。⁽¹⁵⁾

(2) 凹形玉⁽¹⁶⁾

圖8に示したのは婦好墓の出土品であるが、三つの尖りの基部の斜めに磨り込んだ痕、不正整な造型、孔の周圍の平均な面のとり方など、どう見ても技法の點から殷後期のものとは全く異なり、また安

陽小屯二三三號墓出土品、侯家莊一〇〇一號墓、一〇〇二號墓の出土品のごとき殷後期の尖りの小さいものと比べても形態が全く違つてゐる。右に列舉したやうな特徴は、圖10に引いた今日の旅大市營城子四平山石室墓の出土品と共通してゐる。この積石の石室墓は近時の時代區分でいふと小珠山上層類型に屬し、⁽¹⁹⁾カーボン・デイトーングで前二千年前後の年代が出されてゐる。⁽²⁰⁾婦好墓のものがこの文化のものかどうかかわからないが、前引の例からこのやうな作りのものについて一つの目安が得られる。よう。

殷より古い時期の凹形玉としては他に山東の大汶口文化のものがある。⁽¹²⁾圖9は膠縣三里河發掘のもので、尖りの基部の斜めに磨り込んだ跡は圖10と近いが、全體にもつと整正に形造られてゐる。圖11は夏竦前引論文に圖版の掲げられてゐる滕縣莊里西の龍山文化遺蹟の採集品であるが、これは更に正整な作りで、牙飾をもつ所など殷のものに近い。然し突出部が前引の殷後

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

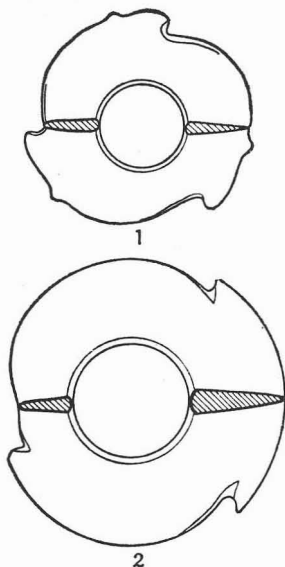


圖9 凹形玉，胶縣三里河，大汶口文化，3/5

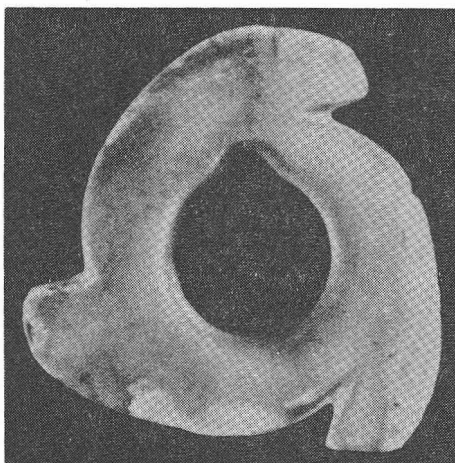


圖8 凹形玉，婦好墓，長徑 6.1cm

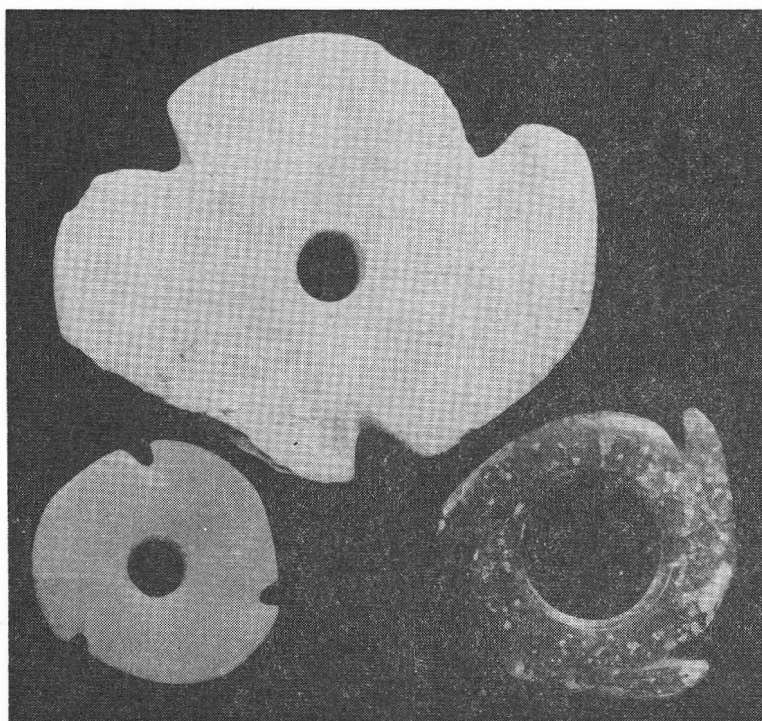


圖10 凹形玉，旅大市營城子四平山，小珠山上層類型，上，長徑 8.6cm

期のものより大ぶりに削り出されてゐる點に相違が認められる。また陝西省神木縣石峁の石棺墓の出土品がある(圖12)。この遺物は前二千年紀の前半頃の大口文化のものであることが知られてゐる。⁽²²⁾ 同じ型式の遺物であるが、寫眞で見る限り、これも圖8 10よりも整正な細工である點に相違が見受けられる。

以上、比較の材料は乏しいが、現在知られる資料から見る限り、婦好墓發見の圖8の遺物が、作行きの點で殷のものとは全く

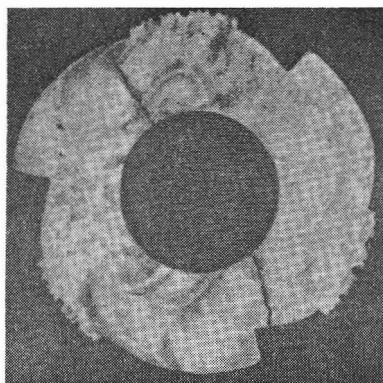


圖11 囧形玉，滕縣莊里西遺蹟，最大徑8cm

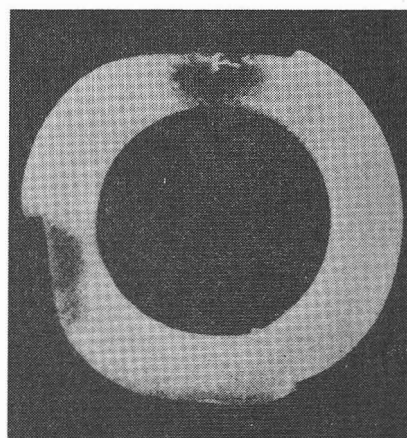
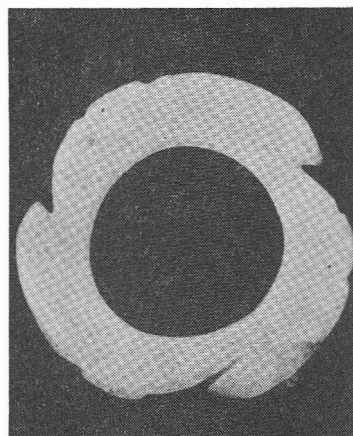


圖12 囧形玉，神木石峁，大口文化，上，孔徑6cm，下，孔徑10cm

異なることは勿論、それより遡る遺物の内でも旅大市四平山發見品のやうな田舎出來のものに近いことが知られた。

(3) 石庖丁形玉器

圖13に示した婦好墓出土の石庖丁形玉器は、櫛形で二つの孔を持つ。實用の石庖丁でこのやうな形のは河南省邊では使はれてゐない。龍山文化から殷まで、中原地域で使はれたのは梯形のものである。⁽²³⁾ 殷後期より遡る時代において櫛形で二孔の石庖丁が使はれた文化といふと山東から江蘇省北部の龍山文化がある。圖14に山東龍山文化、圖15に山東龍山文化につづく岳石文化の例を引いた。⁽²⁵⁾ これらでは孔が上下の幅の中央に近い所にあるに對し、圖13は上に偏つてゐる點に相違が認められる。そのやうに上に寄つたものといふと、圖16の吳興錢山漾の出土品がある。良渚文化のものである。

圖13の婦好墓の出土遺物が正確にどこに由來するか、これだけの參考資料から決めることはできないが、それがこれらの櫛形二孔の石庖丁の使はれた右記の地域、文化の方面であつて、梯形の石庖丁の使はれた中原の地でないこと位は、かなりの蓋然性を以て推測することができると考へる。⁽²⁶⁾

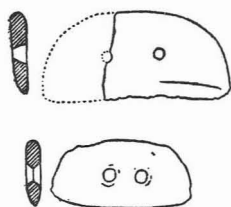


圖14 典型龍山文化の石庖丁，濰坊姚官莊，約 1/4

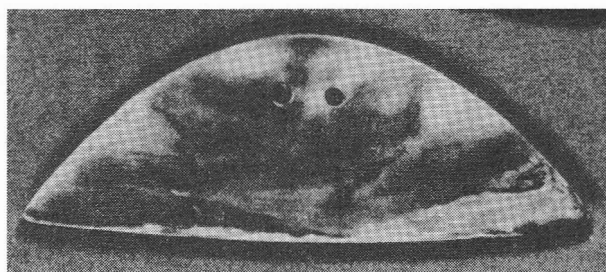


圖13 石庖丁形玉器，婦好墓，長 15.6cm

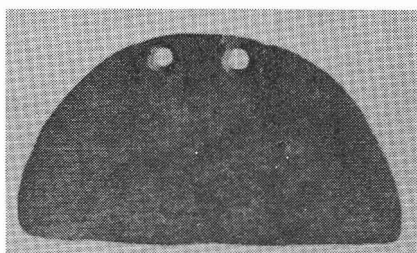


圖16 良渚文化の石庖丁，吳興錢山漾，長 9cm

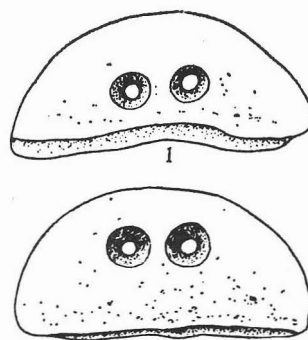


圖15 岳石文化の石庖丁，平度東岳石村，上，1/2，下，3/4

(4) 「玉 紡 輪」

婦好墓の報告書に徑數センチで中心近くに小孔を持つ遺物が二三個、玉紡輪の名で掲げられてゐる。⁽²⁷⁾ 圖17、18はその若干例である。紡輪の名は適切であるまい。どの遺物を見ても孔が中心に位置せず、外周の形の多少歪んだものもあり、糸に撚りをかけるに使ふはずみ車の役には立ちさうにないからである。それらの中には一個、身體を圓く曲げた俯視形の龍を刻んだものがあり、殷の細工と認められる遺物があるが、⁽²⁸⁾ 他は兩側から穿つた外擴がりの孔—原始的な穿孔技術の結果である—、眞圓でない不正整な形、孔の位置の中心からのずれ等の點から考へて、殷後期のものと見ることができない。

これらと似た遺物として殷よりも古い遺物が思ひ起される。圖19 20は鄒縣野店、新沂花廳村出土の遺物で、いづれも伴出物から大汶口文化早期のものと知られるものである。不正整な外周の形、中心から外れた孔の位置等の特徴において圖17 18と共通してゐる。これらは玉環と呼ばれてゐる。婦好墓の遺物もやはり佩玉の環の類であり、古ければ圖19 20と同時代にまで遡る可能性のある、殷よりも古い時代の

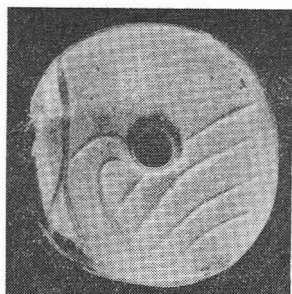


圖18 「玉紡輪」，婦好墓，約 3/4

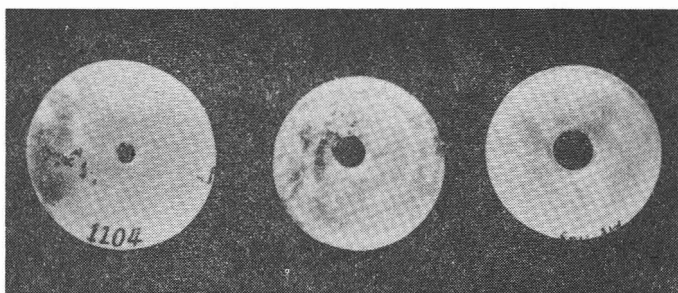


圖17 「玉紡輪」，婦好墓，約 3/4

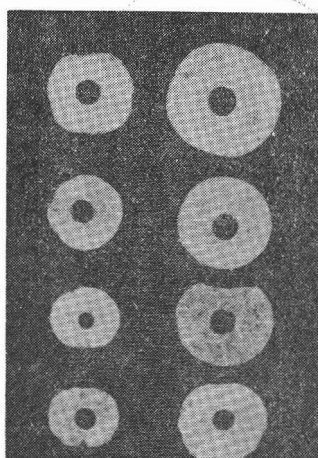


圖20 大汶口文化の小玉環，新沂花廳村

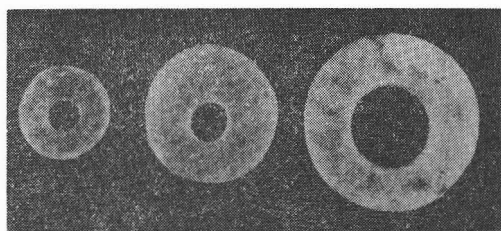


圖19 大汶口文化の小玉環，鄒縣野店

ものと見るべきであらう。

圖18は紋刻のある玉器の再利用品である。もとの紋様が何であつたかは判定しかねるが、左手に見える葉状の部分の鉤形になつた所の曲線の癖は日照兩城鎮の典型龍山文化の黒陶の刻紋²⁹と近似する。この遺物の上限は典型龍山文化まで降ることになる。

婦好は一向に面白くもないこの手の遺物をまとまつた數で保有してゐたわけであるが、或いは偶然發見された一連の古墓からの出土品を自分のコレクションに加へたものであろうか。

(5) 箍 附 腕 輪

婦好墓からは腕輪の類がかなり發見されてゐるが、刻まれた紋様によつて確かに殷後期と知られるものは見出されない。後に記すやうに、中に紋様によつて山東典型龍山文化及び二里頭文化に屬することの知られるものが含まれてゐるが、ここに記すのはまた別の類である。

婦好墓出土の腕輪は三式に分類されてゐるが、Ⅰ式³⁰

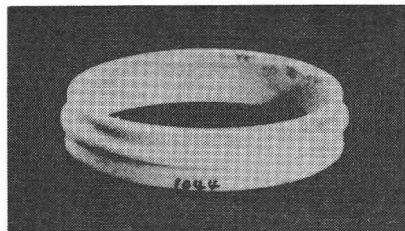
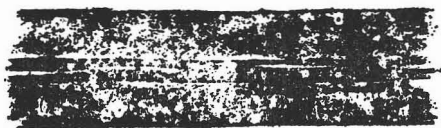
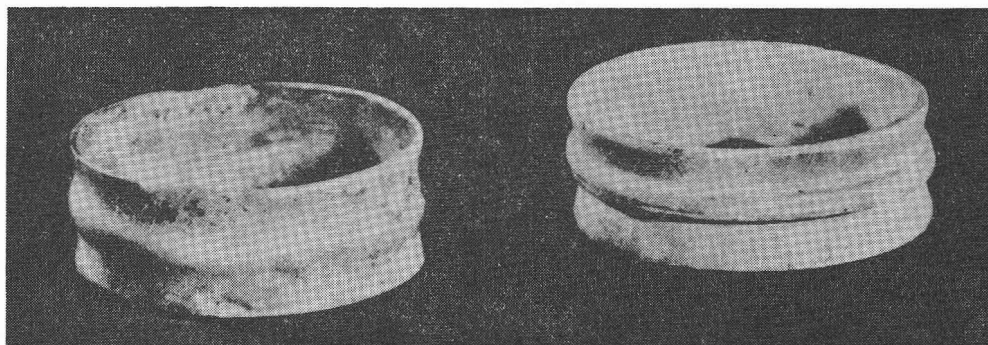
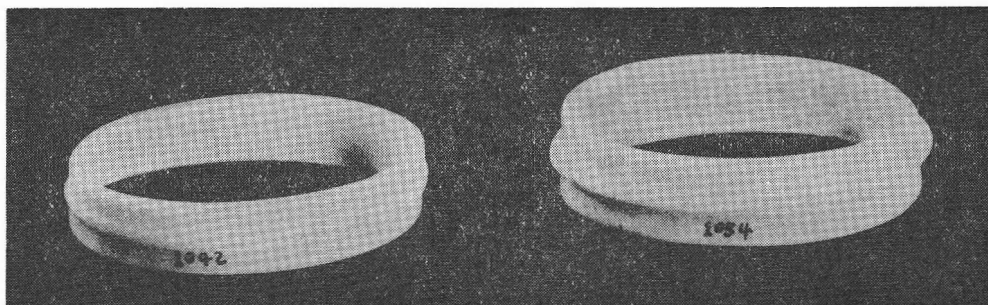


圖21 玉製箍附腕輪，婦好墓，拓本
3/5

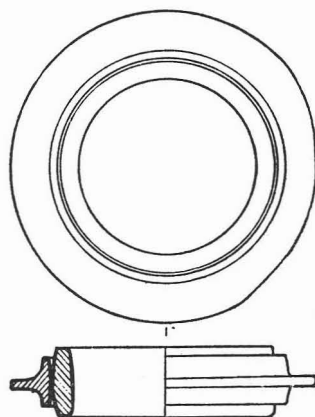


圖22 殷後期の玉製箍附腕輪，
殷墟西區 701 號墓，1/2

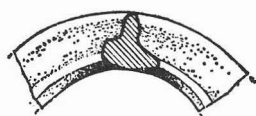


圖25 龍山文化晩期の陶製箍附腕輪，夏縣東下馮，3/5

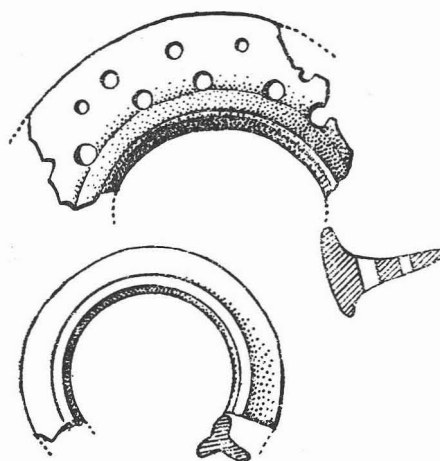


圖24 龍山文化の陶製箍附腕輪，鄭州旭畚王村，上，孔徑約5.5cm



圖23 前二千年紀中期の玉製箍附腕輪，廣漢中興鄉



圖26 龍山文化の陶製箍附腕輪，安陽后岡，1/2

とされたものの中に圖21に引いたやうな、中央に箍をはめたやうな形のものがある。

このやうな形の玉製腕輪の完形品で發見遺蹟の明かなものは從來知られてゐないが、³¹その斷片と思はれるものは一九二九年四川廣漢中興鄉發見の玉器中にある。

圖23に示したもので、折れたものを紐でつなぎ合せる

ために穿けたと思はれる孔がある。この遺蹟の發見物の年代は長いこと十分明かにされなかつたが、近時の考古發掘の進展によつて、かなりはつきりして來てをり、大體中原の二里頭文化と二里岡下層文化に平行するものと考へられる。³²

他に陶製品でこれと近い形のもが知られる。圖24は鄭州旭畚王村の出土品で龍山文化のもの、圖25は夏縣東下馮の出土で龍山晩期のものである。圖24の上は孔徑五・五cmあるが、下は孔徑約四cm、圖25は孔徑四・五cmと小ぶりであるが、小兒用と見れば良からう。これらは箍に幅があつて輪狀をなす點に婦好墓のものと小異がある。これと近い形の玉製腕輪は殷墟西區の殷後期墓の出土品にある。圖22がそれで、中にもう一つ輪が嵌つてをり、外側のものは孔徑五・六cmある。婦好墓のものと箍の形においても共通する陶製腕輪は最近發表された安陽后岡の發掘報告中にある。圖26に引いたものがそれで、箍狀の部分の形、環との比率も婦好墓のものと極めて近い。この后岡の

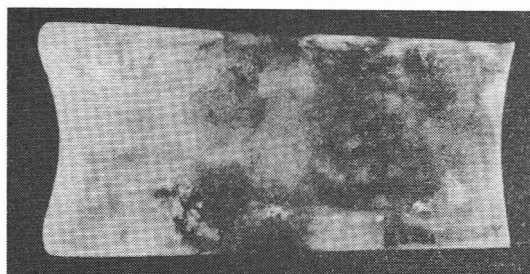


圖27 骨鏹形玉器，婦好墓，殘長 12.5cm

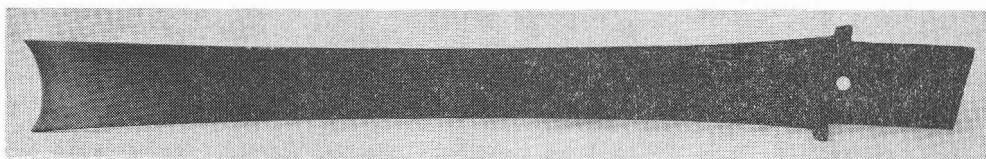


圖28 終末型の骨鏹形玉器，Museum für Ostasiatische Kunst，長 53.5cm

遺蹟は龍山文化の遺蹟で早中晩の三期に分けられてゐるが、この遺物がどの期に屬するかは明かでない。⁽³³⁾ 兎もあれ、婦好墓の前引の玉製腕輪がこのやうな陶製腕輪を使つた人人の間で作られたものであらうことは極めて蓋然性の強いことと考へられる。

(6) 骨鏹形玉器

圖27に示したのは筆者の呼ぶ骨鏹形玉器の刃の側の殘片である。報告にはⅢ式圭と呼ばれ、左側には刃があり、右側は折れてゐると記され、琰圭に近い形と言はれる。⁽³⁴⁾ 凹字形に挟られて刃のつけられた部分の上下の端がほぼ齊等になつてゐる點、二里頭、二里岡、神木、廣漢等のものにおいては矢りの一方が先に出て不齊等であるのと大きな相違がある。そしてこの婦好墓の遺物の特徴は、以前に筆者が終末型とした、圖28のやうに型式化の進んだ類と似てゐる。このやうな型式化した類が婦好の時代までに出現してゐたことの知られる點、貴重である。またこの一點が殘片としてしかこのコレクション中に入つてゐないといふことにより、この式の器が當時世の中から殆んど姿を消してゐたであらうことも知られるのである。

(7) 玉 戈

婦好墓から玉戈は三九點が発見され、報告書はこれを五式に分類してゐる。⁽³⁶⁾ こ

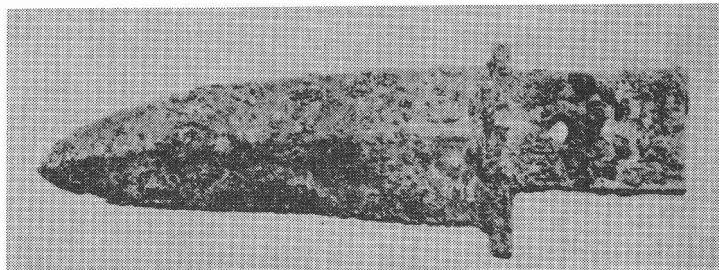
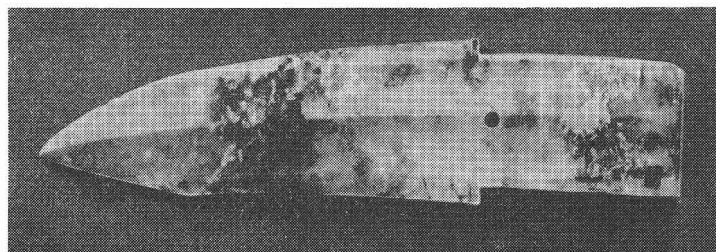


圖29 上、玉戈、婦好墓、長 38.6 cm、下、青銅戈、婦好墓、長 21.7 cm

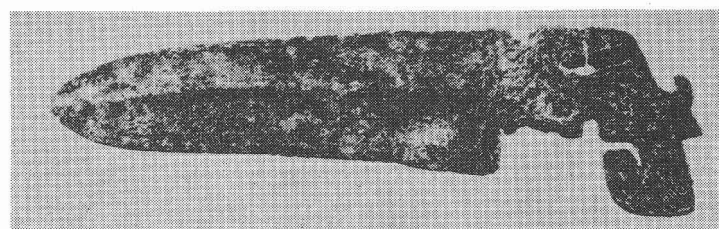
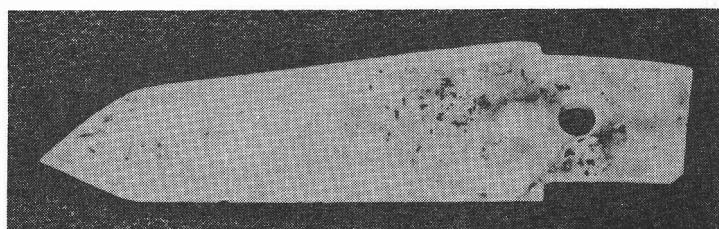


圖30 上、玉戈、婦好墓、長 16 cm、下、青銅戈、婦好墓、長 27.3 cm

の報告書の分類の各式の中には別に類を立てるべきものを含むものがある⁽³⁷⁾ので、その分類にはとらはれずに考察を進める。

婦好墓の玉戈の中には實用の青銅戈の形から次第に遠ざかった形をとり、玉戈独自の形を持つに至った類がある。

報告書の圖版一一二、1、一三のごとく、援の上下の邊や切先の尖り方などが相稱形に近附いた、型式化した類とか、報告書圖版一一四、1、

上、中、2のやうに右記の類を更に簡略化して、援と「内」の境を省略した類がそれである。また報告書、彩版一七、1、上一八、1、上のやうに、切先の斜邊が二段になる類のやうに、その由來について今の所説明をつけかねる類がある。これらについては青銅戈との對比によつてその年代を考へる方法が採れず、従つて年代の新舊を判定することができないので、ここでは考察の対象から外すことにする。

一方婦好墓の玉戈の中には青銅戈に對應した形に成形された類がある。圖2930は婦好墓の玉戈と同墓出土の殷後期の型式を

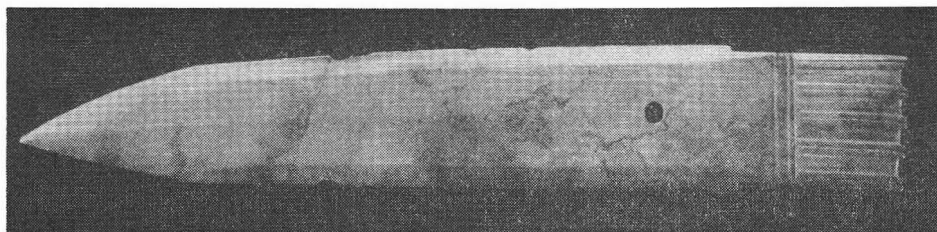


圖31 玉戈，婦好墓，長 28 cm

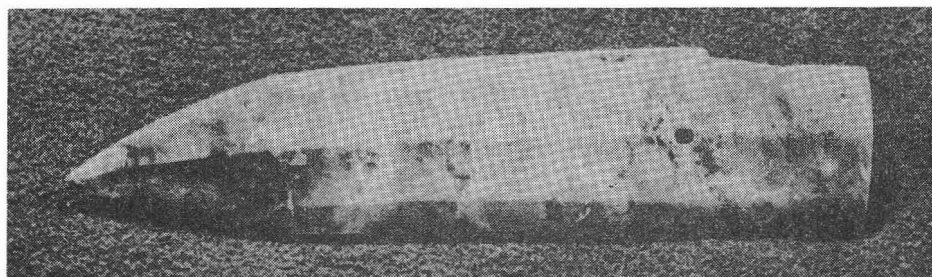


圖32 玉戈，婦好墓，長 24.7 cm

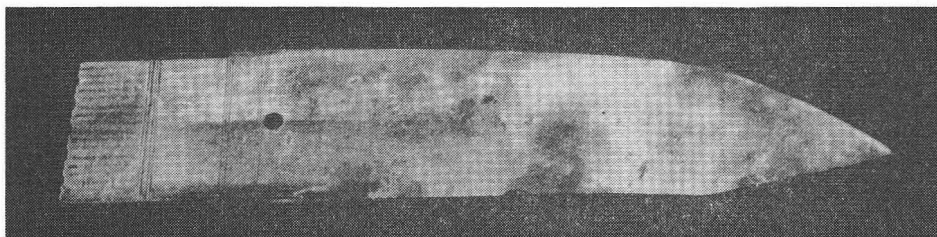


圖33 玉戈，婦好墓，長 44.2 cm

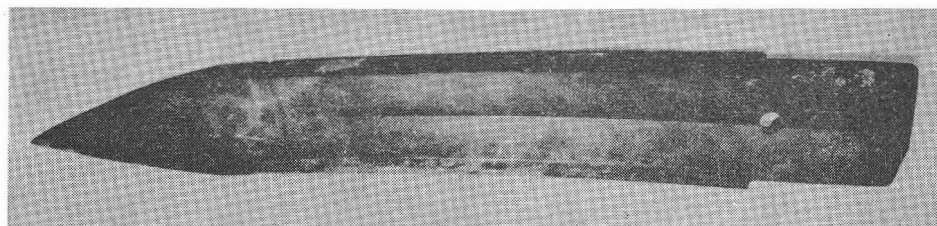


圖34 玉戈，婦好墓，長 39.2 cm

持った青銅戈を對比して示したものである。援が基部に向つてかなり目立つて幅を増し、短かめである點、切先の角度が大である（次に引く殷中期のものに比べて）點などに、玉戈の製作者の意識の中にここに引いたやうな青銅戈があつたことが明かに看取される。即ち、この式の玉戈は殷後期の青銅戈の使はれてゐた時代の製作と知られるのである。

圖 29 30 所引のやうな類に對し、婦好墓出土の玉戈の中には圖 31—34 に掲げたやうな、援の先から

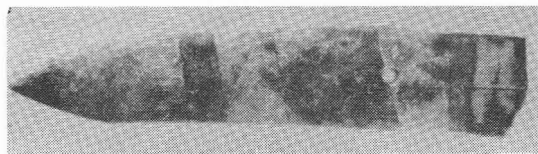


圖35 殷中期の玉戈，黃陂盤龍城，長 28.8 cm



圖36 殷中期の青銅戈，黃陂盤龍城

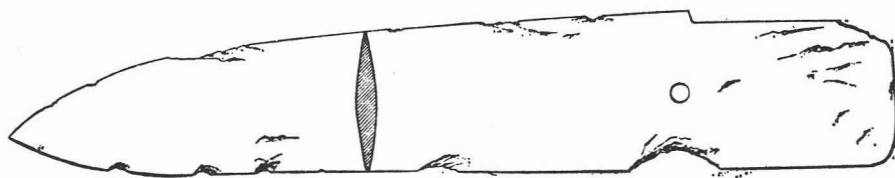
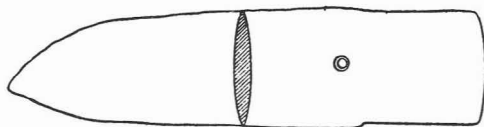
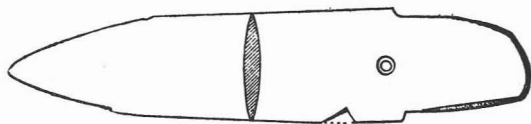
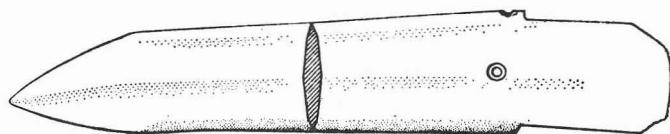


圖37 殷中期の玉戈，鄭州二七路，1/4

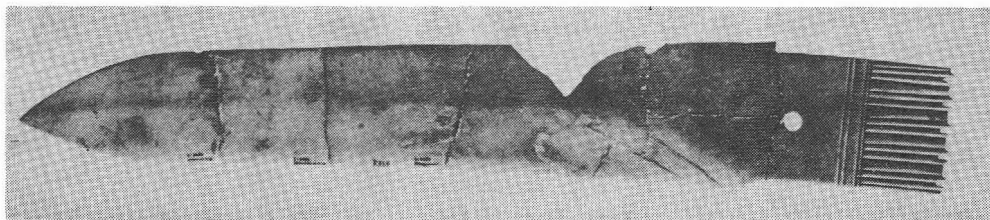


圖38 殷後期の玉戈，安陽侯家莊 1001 號墓

基部まで目立たない形で幅を増し、先端の尖った部分のなす角度が右に引いた類よりも小さい類がある。前引の類が太短かく丈夫さうであるに對し、この類は全體にほつそりした印象を與へる。このやうな特徴をもつた青銅戈は殷中期に見出される。圖36に引いたものがそれである。圖35の玉戈は圖36下の戈と同じ墓から出土したもので、兩者は同じ特徴を持つてゐる。圖37も殷中期の遺物と伴出した玉戈であるが、いづれも同時期の前引青銅戈と同じ特徴を具へてゐる。とすると、圖31—34に引いた同じ特徴を持つた婦好墓の出土品は、殷中期に製作された古物である蓋然性が大である。後の時代に、前の時代に作られ始めた型式の器を引續き作るといふことは幾らでもあることである。然しその場合、外見の類似にもかかはらず、製作者の時代に行はれた器物の形の特徴が必ず露呈されてゐる、といふのが古物鑑定者の通念である。平たく言へば、いくら上手に眞似したつもりでも、模作者の時代の特徴がどこかに出てしまふ、といふことである。他人を騙さうといふのでない場合は尙更のことである。圖38は安陽侯家莊一〇〇一號墓出土の、圖31とよく似た例である。兩者を比べてみると、圖38の方は切先の形が殷後期の大きな角度を持つた形になつてゐる。このことにより、この圖38の玉戈は圖31のやうな型式の器を倣つて殷後期に作つたものであることが知られるのである。

婦好墓出土の玉戈の中には、援の基部に向つての幅の増加の具合や切先のなす角度の觀察によつて、どの時代に歸屬させるべきか、明確に判斷の下せないものもあることはあるが、右のごとき典型的な例のあることもまた確かなことと考へる。

(8) 玉 刀

圖39上は婦好墓出土の玉刀、圖39下は安陽武官村大墓陪葬坑W8出土の青銅刀で、この墓は出土遺

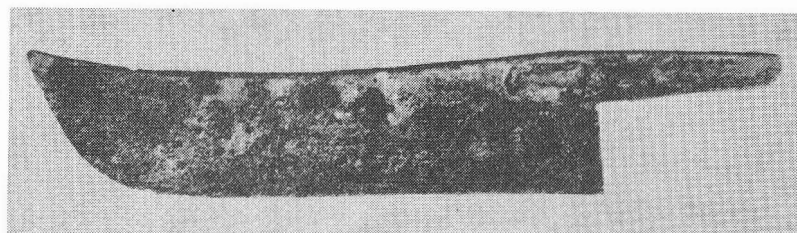
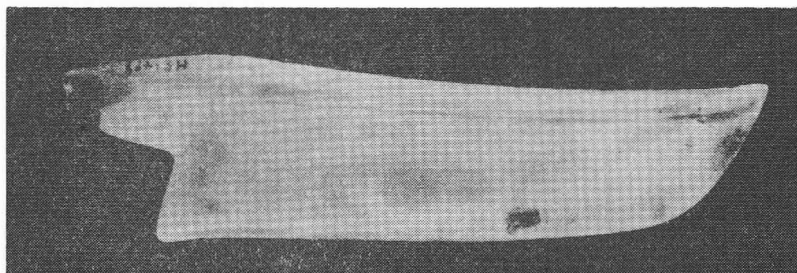


圖39 上，玉刀，婦好墓，長 13.2 cm，下，殷後期の青銅刀，安陽武官村大墓，全長 35 cm

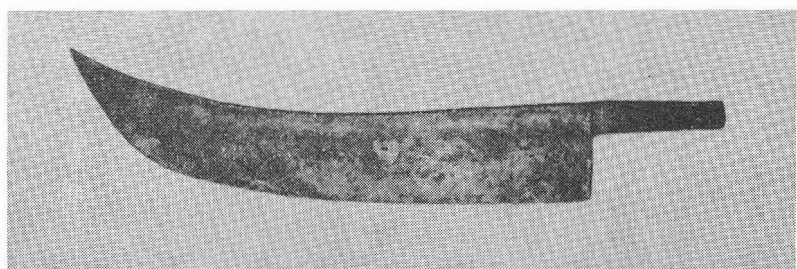
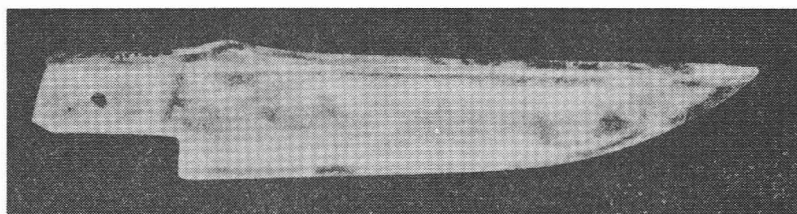


圖40 上，玉刀，婦好墓，長 13.8 cm，下，殷中期の青銅刀，輝縣琉璃閣，長 35 cm

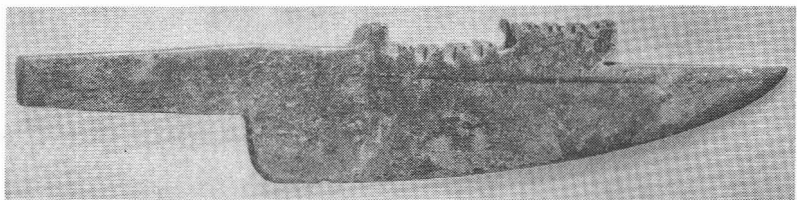


圖41 二里頭期頃の玉刀，Dr. Arthur M. Sackler Collection, New York，長 25.7 cm

物から婦好墓と同時代のものと知られる。両者は極めて近い形を持つ。即ち刀身は長さの割に幅廣く、峰と刃はほぼ平行線をなし、切先に移る所に顯著な曲り角があり、また刃の手許の端の隅角が直角より小さい角度をなす點等である。圖39上の玉刀が圖39下のやうな殷後期の早い時期の青銅刀を模して作られたことが知られよう。

ところで婦好墓からは圖40上のやうな細身の玉刀が出てゐる。これは明かに圖39上とは異つた型式である。これに似た青銅刀といふと、圖40下のごときものと思ひつく。刀身に反りのある點に相違があるが、どちらも細身で、刃は日本刀の物打に當る邊から切先に向つて顯著な曲り角のない曲線を書き、刃の手許の端の隅角が大體直角をなしてゐる點等において共通してゐる。この圖40下は殷中期の型式の青銅戈⁽³⁸⁾と同出である。圖39上と39下の關係と同様、圖40上は40下のごとき青銅刀を模したもので、婦好墓出土の圖40上は殷中期の作といふことになる。

なほ圖41のやうな玉刀があり、圖40上と比べると日本刀の物打に當る所から切先への移行の曲線は更になだらかになり、刃の手許の端の隅角は直角よりも大きい角度になつてゐる點、型式學的に圖40上よりも遡るものであるが、この玉刀の峰の上につけられた牙飾は二里頭三期とされる偃師二里頭出土の骨鏃形玉器圖64のものに近く、この玉刀の年代も大體その時分と判斷される。筆者の考へた圖40上の遺物の年代的位置づけの正當であることを裏づける資料と考へる。

(9) 大 圭

婦好墓から三三件もの多數が発見されてゐる。⁽³⁹⁾この中にやはり婦好よりも古い時代の遺物が入つてゐる。大圭は柄のあるのと反對の側に挟り込みが入つてゐるが、その部分の曲線には時代による特徴の變化があつて、それによつて年代を判定することが出来る。これについては以前に記したことがあるので⁽⁴⁰⁾その要旨のみを記す。次のごとくである。

二里頭期には圖42の二里頭二期の例、圖43の二里頭三期の例に見るやうに、軽く内反りで一番深く切り込んだ點が中央あたりに來るが、上下で均一な曲りではなく、一端に近附くにつれて僅かつ曲りが強くなる傾向がある。全體の印象は典雅なや

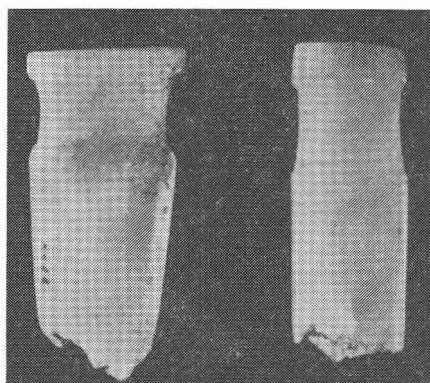


圖44 殷中期の大圭，鄭州銘功路，右，長 6.6 cm，左，長 7 cm

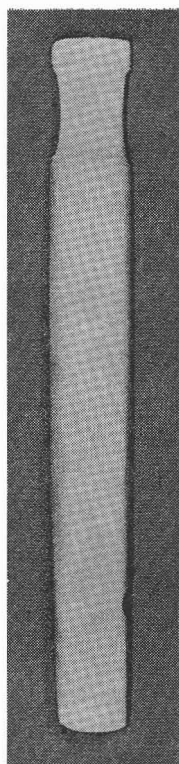


圖42 二里頭二期の大圭，偃師二里頭，長 16.2 cm

圖43 二里頭三期の大圭，偃師二里頭，長約 16.8 cm

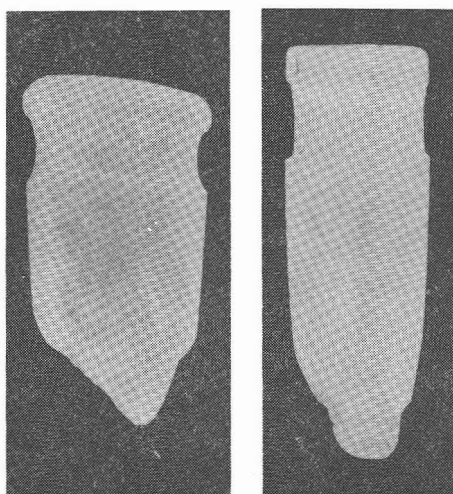


圖46 大圭，婦好墓，右，長 6.3 cm，左，長 4.3 cm

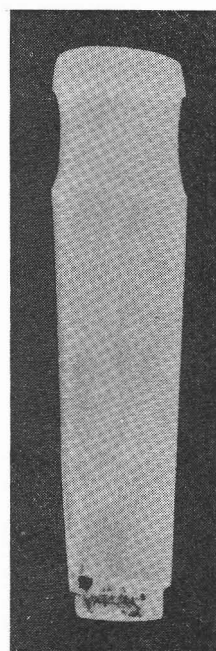
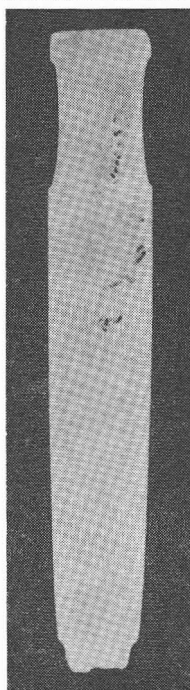


圖45 大圭，婦好墓，右，長 12 cm，左，長 13.1 cm

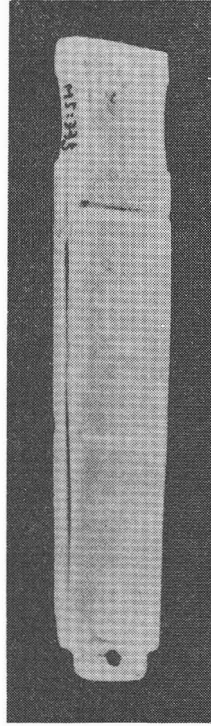
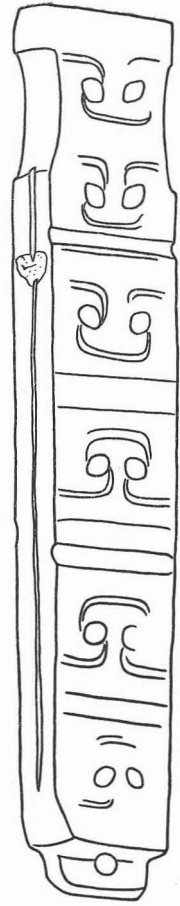


圖47 大圭，婦好墓，圖原寸

さしさにあふれた、といふ所である。

殷中期、即ち二里岡下層期になると圖44の右器や同圖左器の右側に見るやうに、二里頭期にあつた曲りの強くなる部分が強調されて一方に更に偏り、曲線は力強くはあがデリカシーに缺けたものに變つてゐる。全く同じ性格の線は圖56 57に引いた、同じ時期の璜形玉器の入字形の袂りにも見出されよう。

殷後期になると大圭のこの部分の袂りは、一端から他端に向つて曲り方の微妙な變化は失はれ、ただ中窪みといふ以外に特色のないものに變るが、ここでは例を省く。

右に記したやうな觀點から婦好墓の出土品を見てみると、圖45のやうな二里頭期の特徴を持つた袂りのあるもの、圖46のやうな殷中期の特徴の顯著な袂りのあるものが見出される。これらがそれらの時代の遺物であることは疑ひない。

他に圖47に引いた大圭は注目値ひする。袂りの部分の曲線は二里頭期の特徴を持つてゐる。寫眞⁽⁴⁾だけでは見難いので描き起しを添へたが、兩端が低い隅圓の方形の突起になつた一種の渦紋が刻まれてゐる。報告書によると兩面にあるといふ。これに似た紋様の拓本は婦好墓出土の腕輪に類例がある(圖160上から三つ目)。これらの遺物に刻まれてゐる渦紋は、C字形渦紋の兩端から八字形の線が始まり、兩者の接點に隅圓方形の突起が構成される、といふ構造であるが、この隅圓方形の突起を除き去したものは、また後に引く圖72 73の二里頭期の牌形飾の上半にも見出される。この場合C字形及び八字形の渦紋に夫々小枝が出てゐるのである。圖47の大圭を二里頭期のものとした先の判定を裏づける事實である。

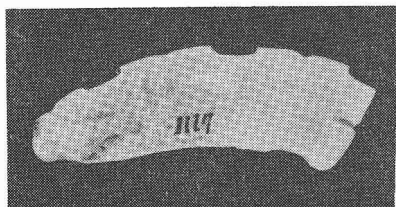


圖49 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，
長 5.8 cm

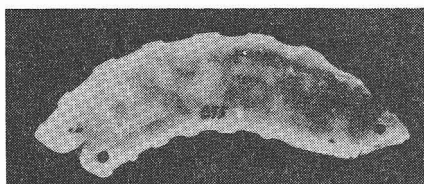


圖50 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，
長 11.2 cm

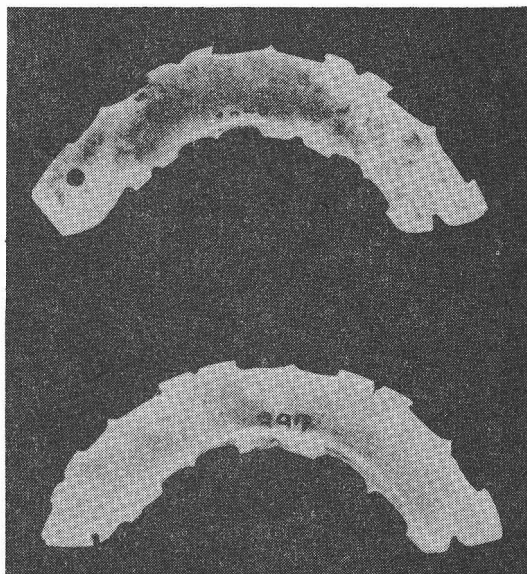


圖48 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，上，長 6.4 cm，
下，長 6.5 cm

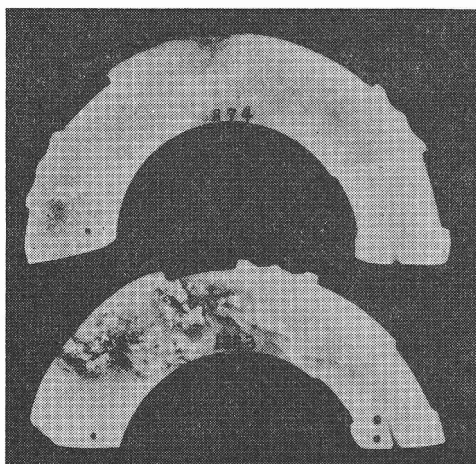


圖51 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，長 8.5 cm

圖52 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，
上，長 11.2 cm，下，長 11 cm

この圖47の器はこれを據り
所にしてこの類の紋様をつけた
器物の年代を知ることがで
きる點重要である。

(10) 魚尾形付璜形玉器

婦好墓からは圖48—54に引
いたやうな、一方の端が魚尾
形になつた璜形玉器が一九點
出てゐる。報告書にV式璜と
呼ばれる類である。それらは
總て、魚尾形と反對の端は粗
い細工で直線的な形に磨られ
てをり、原の形を失つてゐる。
圖55は管見に觸れた唯一の完
形品で、魚尾形と反對の端に
口を開いて牙を露した龍の類
の頭が附いてゐる。背に入字
形の袂りがつけられてゐるが、

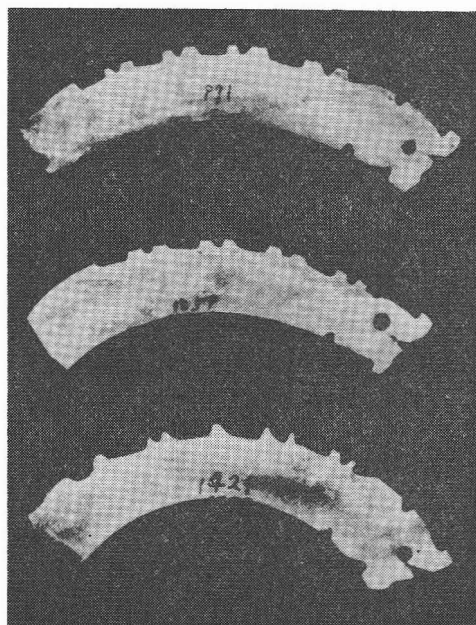


圖54 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，上，長 7.3cm，中，長 6.7cm，下，長 7cm

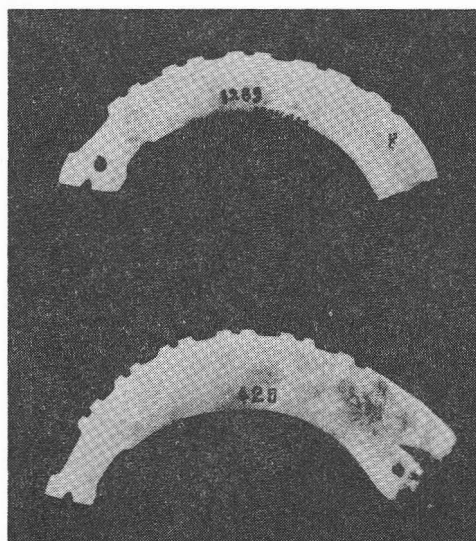


圖53 魚尾形付璜形玉器，婦好墓，上，長 7.5cm，下，長 8.4cm

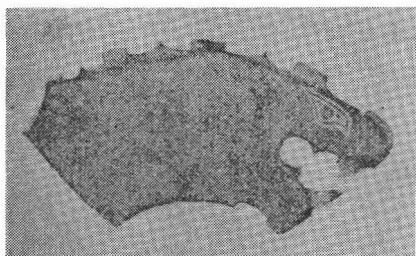


圖56 殷中期の龍頭璜形玉器，鄭州白家莊，長 9.5cm

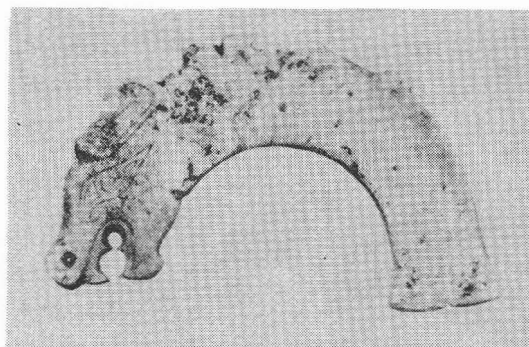


圖55 龍頭魚尾璜形玉器，長 8.9cm

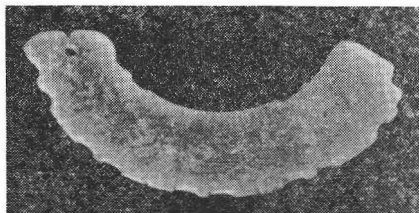


圖58 魚尾形付璜形玉器，涇陽高家堡，長 11cm

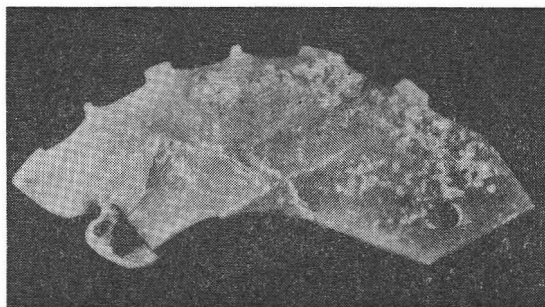


圖57 殷中期の魚尾形付璜形玉器，鄭州銘功路，長 11cm

先にも引いた圖56の殷中期の鄭州白家莊の出土品は同様な龍頭魚尾の玉器の殘片と知られる。圖56と同式の入字形の袂りをつけた圖48の魚尾付の璜も當然圖56と同時代のものであるが、魚尾形の反對の端には同様な龍頭があつたはずである。一端が魚尾形になつた璜形玉器は、縁に刻まれた牙飾の型式において様々であり、またその刻まれないものもあるなど、一樣ではないが、現在粗く磨りなほされてゐる側には、もともと圖55同様、何等かの形の頭があつたはずである。殷後期の早い時期の青銅器と伴出した安陽小屯三三一、三八八號墓出土の類例も同様、魚尾形と反對側に頭部がない。⁴³異族の神であり、惡意ある力を振はれることを恐れて片端から頭をもいでしまつた、といふやうなことが想像される。それにしても徹底的にやつたものである。圖57は鄭州銘功路西側二號墓の出土で殷中期の青銅器と同出のものであるが、これにも同様な細工がなされてゐる。それが行はれたのは殷中期を下限とする時期のことであつたことが知られる。

この式の璜の縁に刻まれる牙飾には圖55—57、48のやうなもの他にも異なつた種類がある。圖49は48の入字形の袂りに挟まれた、魚尾形の端のやうな形を残し、入字形は作らなかつたものと見ることができ、圖55—57、48と同時期のものと判定される。圖50は圖57で袂りによつて切り残された、大小交互になつた突起の横幅を廣くした形である。型式學的に圖57より降るものであるが、實年代でどれ位に當るかは知る術がない。圖51も50と同じ式で、入字形を一つだけ刻んだものである。

以上は年代の大體判定できるものであるが、圖52のやうな三山形の牙飾、圖53 54のやうなまた別の形のもの等は、今の所年代のわかる遺物で比較の對象となる遺物が知られない。この式の牙飾が婦好の時代乃至はそれより古い、といふことを知る材料としては使へるのであるが。

なほ圖58は圖48と同じ方式で入字形の袂りを加へた魚尾形付璜形玉器であるが、涇陽高家堡の西周I A式の青銅器の出た墓の出土品である。このやうな古玉の使用が殷代に限らないことが知られる。

右に引いたのは鬼神の形に作られた玉器から頭をもいで再使用したものであるが、圖48のやうな殷中期の玉器を別な形で再使用した例をついでに引いておかう。圖59—61は西周中・後期の鳳凰を刻んだ玉であるが、これらの玉器の縁には圖48に見る



圖61 西周中・後期の鳳凰を刻した殷中期の玉器，高 9.2cm



圖60 西周中・後期の鳳凰を刻した殷中期の玉器，高 8cm

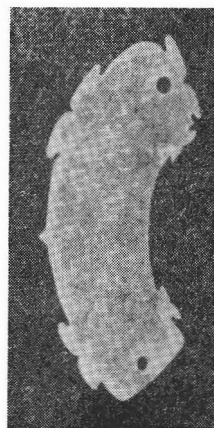


圖59 西周中・後期の鳳凰を刻した殷中期の玉器，長 安普渡村，長 8.5cm

のと全く同じ牙飾がある。これは一體どうしたことか。この式の入字形の袂りが殷中期のものであることは先に記した通りで動かぬ所である。西周中・後期の人が偶然殷中期の玉器を見てこの式の牙飾が氣に入り、それを模した、とでも考へられようか。然しさうであれば袂りの曲線に、中に刻まれた鳳凰に使はれてゐるやうな、圓滑に流動する優雅な線の性質が反映されて然るべきであるが、さういふことは全くない。そこに見られるのは圖48、56、57に見るのと同じ、彈力の強い殷中期の線そのものである。これはやはり殷中期の古玉を發見して、それに西周中・後期の工人が當時流行りの鳳凰紋を刻んで再利用した、といふ以外には考へられない。圖61で刻まれた線が玉器の輪廓から外み出しかけたり、玉材に切り込まれたコマ形を飛び越したりしてゐるのも、そのやうに考へることによつてよく解釋がつかう。

(11) 首尾付璜形玉器

前節に記した類と異なり、數は出てゐないのであるが、婦好墓からは圖62のやうな遺物が發見されてゐる。同形の一対が環をなすやうな形に復原されてゐる。婦好がこのやうな形

にして繋ぎ合せて使つたと考へてよいであらうが、本來そのつもりで作られたものかどうかは別問題である。後に記すやうに一つ一つが頭と尾を持つた動物形に象られてゐるからである。

ところでこの璜形玉器の一端（下のものの右端、上のものの左端）に鉤状の部分があるが、その「し」字形をなした部分の特徴的な形は圖63の安陽小屯三三一號墓出土の璜形玉器の右端にも見出される。また牙飾に注目すると、圖62 63でaとした部分の形が同一である。即ち左方が先づ深い凹字形の袂り込み、次いで淺く短い同形の袂り込み、その右にレ字形の袂り込みが作られる、といふ構成である。兩者は同じ文化の所産と判斷される。

さて、圖62には對應する部分がないが、圖63の方には圖にbと示したやうな牙飾が形造られてゐる。この形は偃師二里頭の骨鏟形玉器（圖64）、これと平行の時期の神木縣石峁出土の同形玉器等の、船形の側飾を思ひ起さしめる。圖63では側飾の袂り込みが圖64のもの程深くないのであるが、いつてこれ以外に比較すべきものはない。圖64は二里頭三期とされるが、この船形側飾の證によつて圖63及びそれとaの部分で牙飾の形が共通する圖62の年代は、大體二里頭期を指し示すことが知られる。

圖62については注意した「し」字形の長めの鉤形の部分を持つた璜形玉器は他にも見出される。出土地不明の資料であるが圖65 66はそれである。⁽⁴⁶⁾これらは、圖66のやうな方向で見ると、上端に大きな鼻面と上反りの下顎を持つた頭があり、下端に上に巻き込んだ尾の刻み出された一種の龍形であることが知られる。これと比較してみれば、圖62でも一端の鉤形は尾であり、反對の側はやはり上反りの下顎を持つた頭であることが知られよう。この例で鼻面に圓味がないのは、一對で環になるやうにして使ふため、少し磨られた結果である可能性が考へられるが、實物を検分してゐないので斷言はできない。

圖65 66の背中の側に二つ乃至三つの山の並ぶ形の牙飾がある。下擴がりで角々に圓味のあるこの牙飾は、二里頭出土の骨鏟形玉器に見るものに近い。⁽⁴⁷⁾

圖65 66の尾に見るやうな、何か少々間延びした、香氣な印象を與へる鉤形は、また圖67—70に示した虎形の玉器にも見出される。上下の顎から牙の突出した口、先端が前向に折れた耳を持つた頭の形や足の表現、尾の形等においてこれらの遺物は互

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

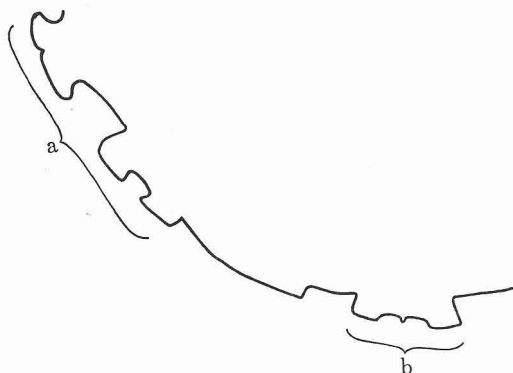
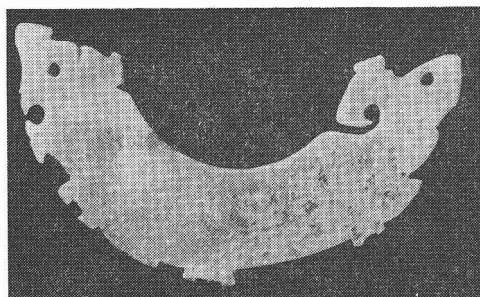


圖63 首尾付璜形玉器，安陽小屯，長 11.7 cm

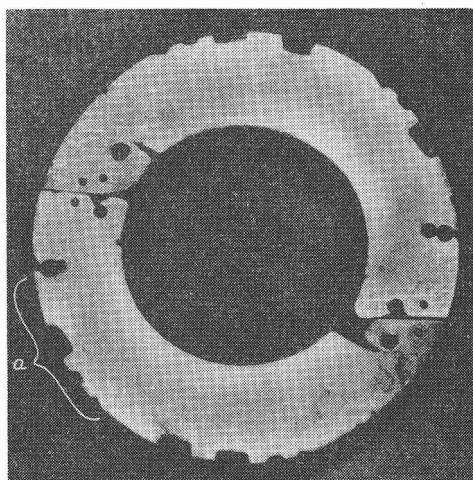


圖62 首尾付璜形玉器，婦好墓，徑 11.2, 11.3 cm

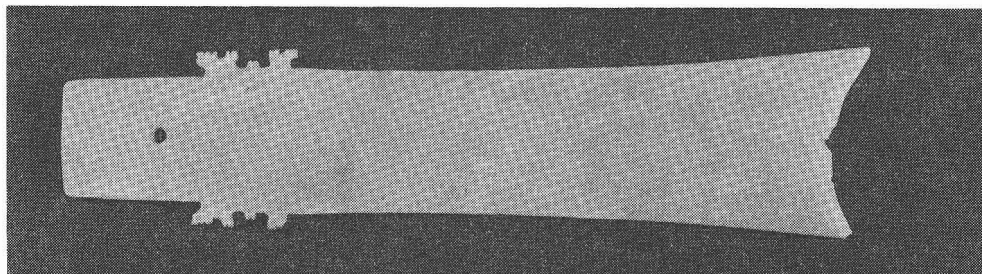
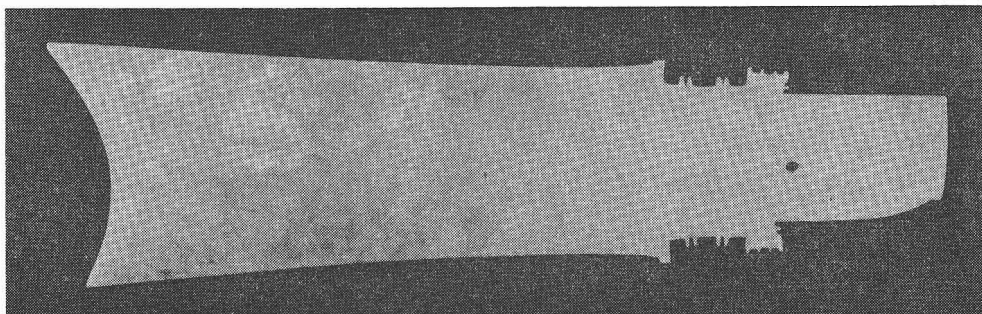


圖64 二里頭三期の骨鏟形玉器，偃師二里頭，上，長 54 cm，下，長 48.1 cm

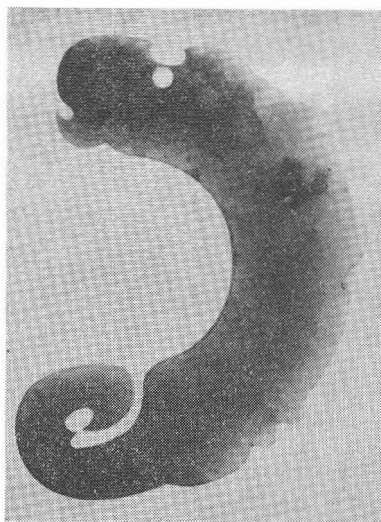


圖66 「し」字形の尾を持つ横形玉器,
Ashmolean Museum, Oxford,
Ingram Gift, 長 8.8cm

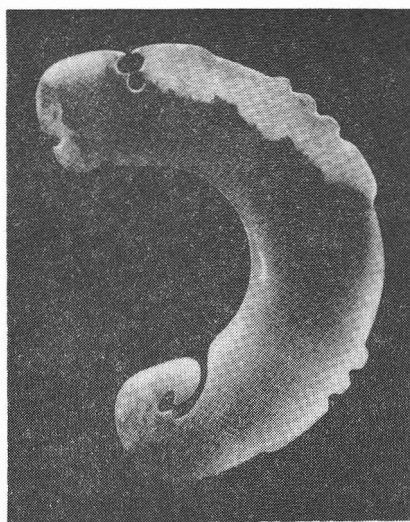


圖65 「し」字形の尾を持つ横形玉器,
長 8.8cm

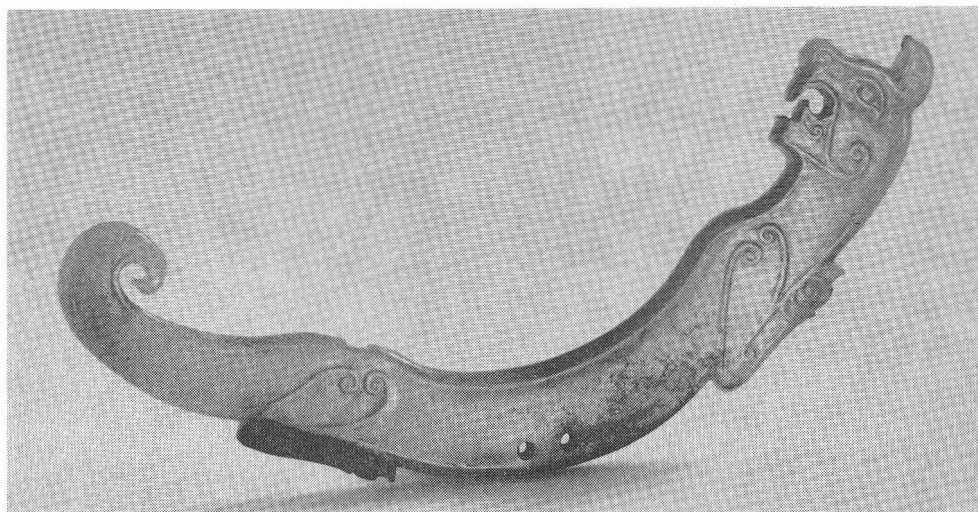


圖67 虎形玉器, Asian Art Museum of San Francisco, The Avery Brundage Collection,
長 13.4cm

二八
ひに共通し、同じ文化
の所産と知られる。圖
67は突線の表現をとり、
龍山文化の技法を残す
ものと見られるのであ
るが。

右に引いた遺物に見
る特徴的な鉤形は、圖
71の偃師二里頭四號墓
出土のトルコワーズ象
嵌青銅牌飾に見出され
る。二里頭二期の晚い
時期のものとされる。⁽⁴⁸⁾
下半を占める頭部から
兩側の縁に沿って立ち
上り、次いで内向に曲
る大きな角形の部分が
それである。同様な曲
線は圖72のウインスロ

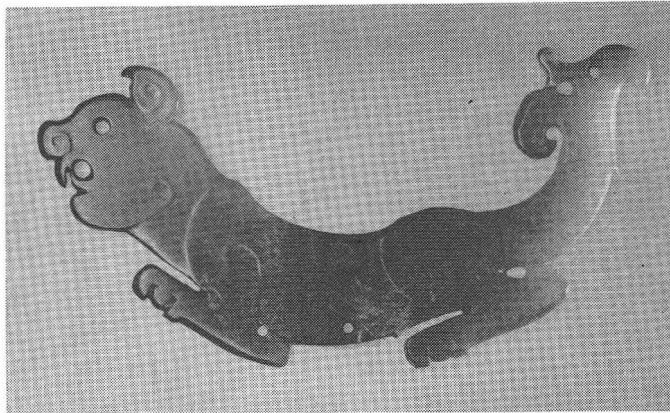


圖68 虎形玉器, Fogg Art Museum, Harvard University, Grenville L. Winthrop Bequest, 長 8cm

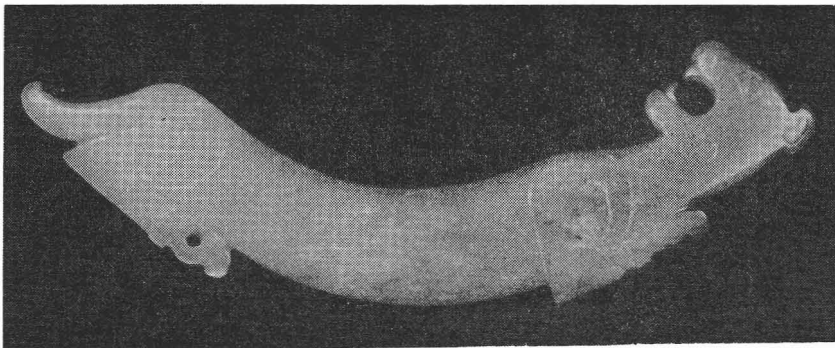


圖69 虎形玉器, Seligman Collection, 長 10.3cm

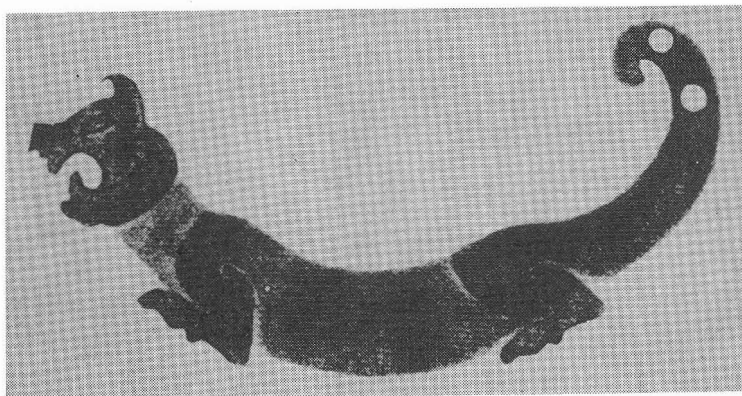


圖70 虎形玉器

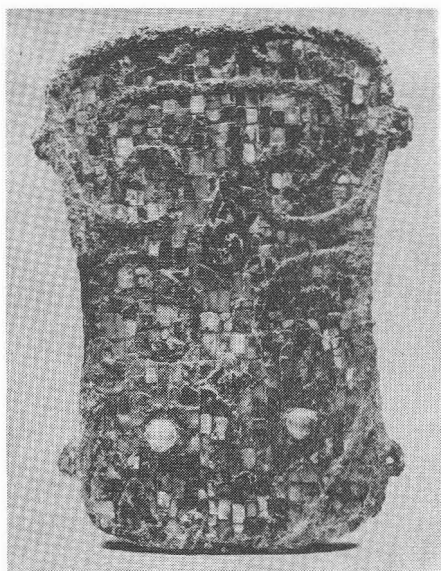


圖72 トルコワーズ象嵌青銅牌, Fogg Art Museum, Harvard University, Grenville L. Winthrop Bequest

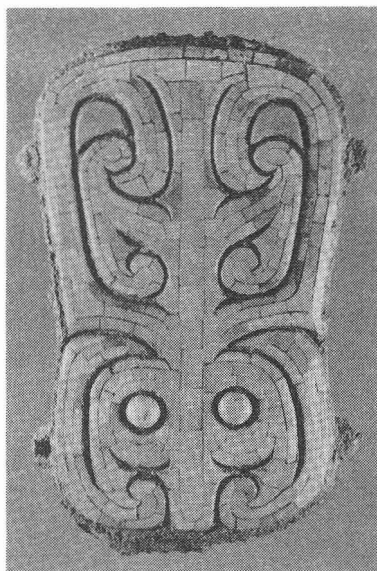


圖71 トルコワーズ象嵌青銅牌, 偃師二里頭, 長 14.2cm



圖74 二里頭期の陶片, 偃師二里頭, 樋口隆康氏撮影



圖73 トルコワーズ象嵌青銅牌, Collection Dr. Paul Singer, 長 14cm

ツブ・コレクション中の牌飾、圖73のシンガー・コレクション中の同様な遺物の上部にも見出される。これらは出土地不明の遺物であるが、圖71に比べると全體が四角つばい形である點に小異があつて、同一時期とは言へない。然し紋様に使はれる線の性質の共通性から、やはり圖71に近い時期といふことは言へるであらう。

他に、土器の刻紋であるが、今問題の性質の曲線はまた圖74に引いた偃師二里頭の發掘品にも見出される⁽⁴⁹⁾。双身蛇の頭の兩側を限る曲線や、頭の右の羽紋の畫く曲線がそれである。この土器は一九六〇年代前半の發掘であるため二里頭何期といふことはわからないが、内端に蒙古皺に當る下垂部のない目の表現は、二里頭宮殿址附近で發見された二里頭三期埋納⁽⁵⁰⁾の鬼神面を刻んだ大圭⁽⁵¹⁾のものと近く、その年代が二里頭期であることは問題ない。

以上、婦好墓出土の圖62の一對の玉器に關聯して從來認識されることのなかつた一聯の二里頭期の玉器を明かにすることができたと考へる。

(12) 圓盤付器臺

兩方の口がやや外擴がりになつた圓筒形の中程に圓盤を嵌めた形の玉器をこの名で呼ぶ。その用法については今の所確かなことを言ふことはできない。器臺と呼んだ所以については後に記す。

圖75は婦好墓の出土品でⅡ式圓箍形器と呼ばれてゐる⁽⁵²⁾。報告書によると中間の所に圓盤形を作り出し、その縁には五個の長方形の凸稜があり、凸稜の兩端近くに各三本の縦向の刻みが入られてゐる。高さ四・八cm、孔徑六・七cm、肉の厚さは一mmで製作技術が高度だといふ。

相似た型式の遺物に圖76のごときブリティッシュ・ミュージアムの藏品がある。高約一一・二cm、上の口縁の下に四つの小孔がある⁽⁵⁴⁾。婦好墓のものと比べて全體に厚手の作りで、弦紋の型式にも相違がある。圓盤の周圍の突出部が大根の雙葉のやうに二つに分れた形である點にも違ひがある。圖77は婦好墓の近くで發掘された安陽小屯一八號墓の出土品である。この墓は大體

婦好墓と同時期のものと考へられてゐる。⁽⁵⁵⁾ この遺物も肉厚の作りで圓盤に突出がなく、圓盤の部分の徑も小さい點、退化した型式と見受けられる。

この式の器で現在知られるのはこれだけであるが、その中央に作り出された突出部のある圓盤といふと、圖79のやうなものが婦好墓から出てゐる。中央で二つに分れた突出部の形は圖76のものの方に近い。環は圓でなく橢圓形氣味で孔から周圍に向

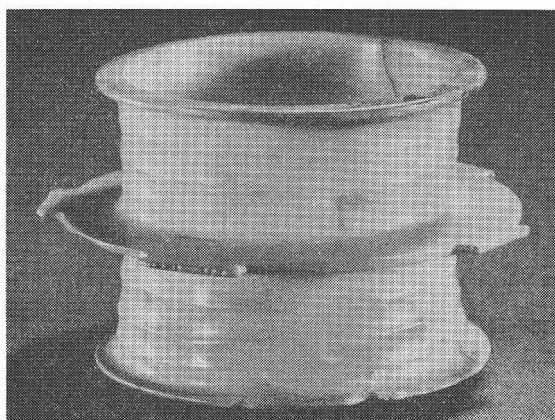


圖75 圓盤付器臺，婦好墓，高 4.8 cm

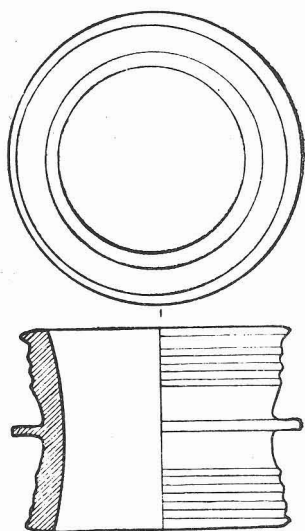


圖77 殷後期の圓盤付器臺，安陽小屯18號墓，3/5

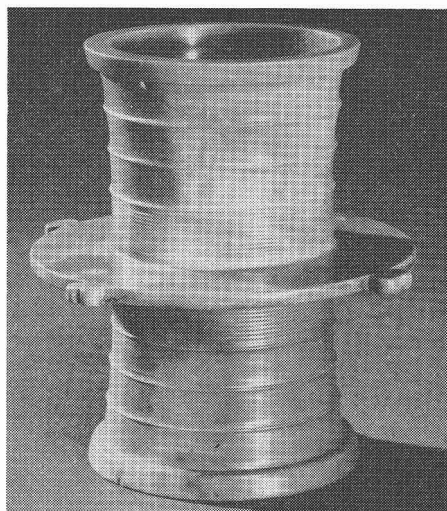


圖76 圓盤付器臺，Courtesy of the Trustees of the British Museum, 高 11.1 cm

つて薄くなり、厚さは不均だとして記される。⁽⁵⁶⁾ 明かに殷後期の作とは異なるものである。圖79は五蓮丹土村の出土品であるが、突出部の形は低い凸字形になる。この遺物の發見についての報告はないが、夏鼐はこの發見とされる別の遺物を龍山文化としてゐる。⁽⁵⁷⁾ 圖80は廣東省の曲江石峽遺蹟第四期に屬する玉製の所謂瑛である。船形の突出物が四つ作り出されてゐる。石峽の第三期は揚子江下流の良渚文化と平行する文化である。⁽⁵⁸⁾ それに次ぐ第四期は、大體紀元前第二千年紀の早い時期といふことにな

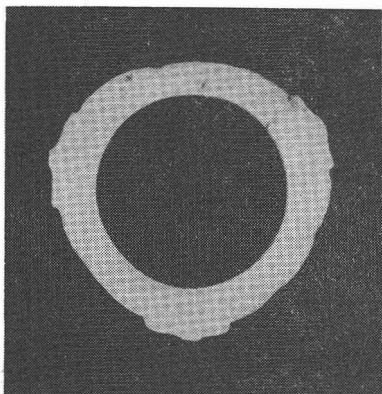


圖79 龍山文化の突出部のある環，
五蓮丹土村，徑 8 cm

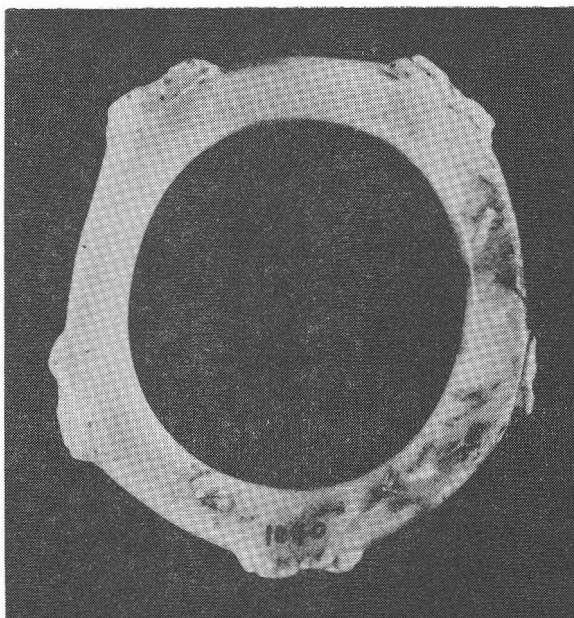


圖78 突出部のある環，婦好墓，長徑 7.4 cm

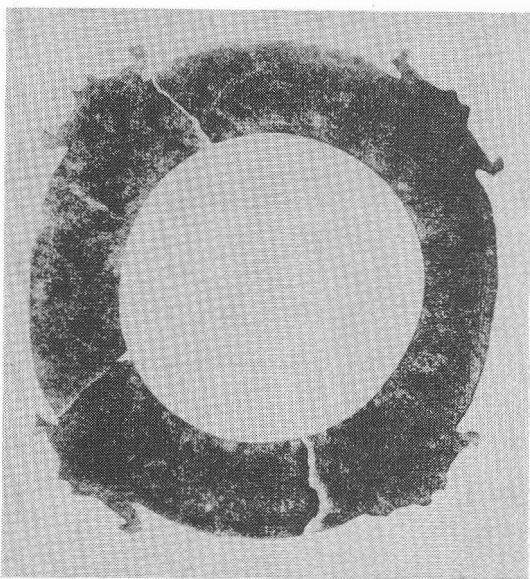


圖81 突出部のある環

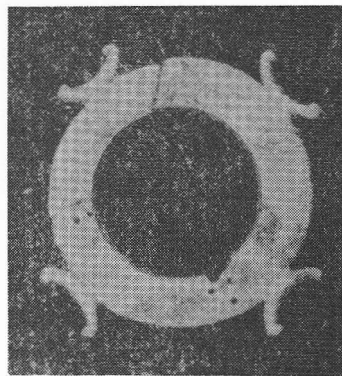


圖80 石峽第四期文化の突出部のある「玦」，曲江石峽

三三

圖 81 は出土地不明の遺物であるが、周縁に四つの船形の牙飾が作り出されてゐる。牙飾の中央の突起が二里头出土の骨鏟形玉器のもの（圖 64）では角張つてゐるのに對し、これは圓味のある二つの瘤の形をとる。この形の圓味のある牙飾も二里头の出土品にあることは先に記した通りである。圖 52 に見るごときモチーフを

らうか。⁽⁵⁹⁾

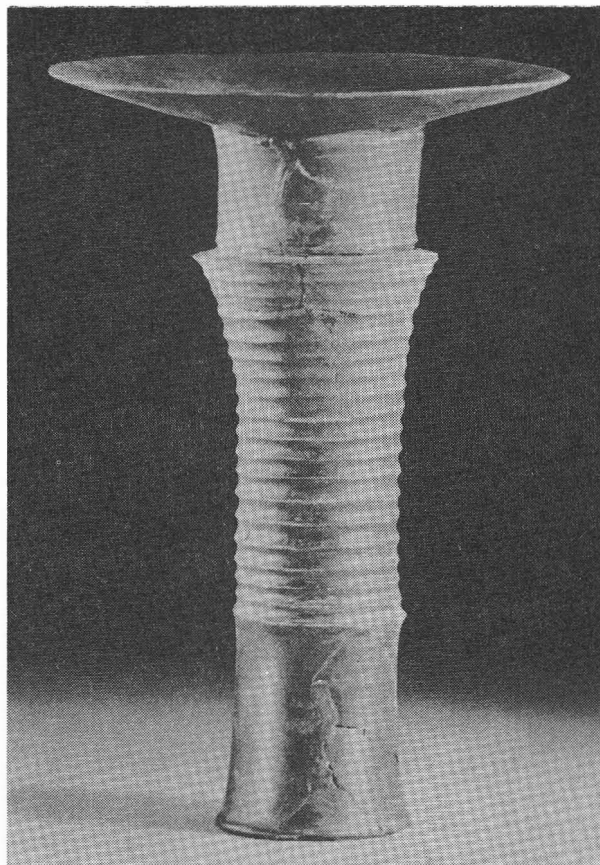
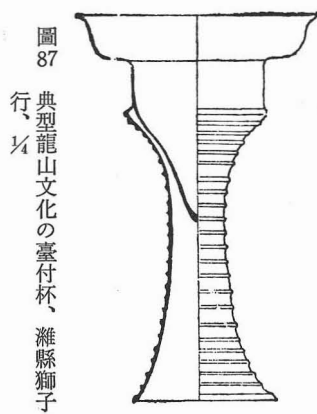
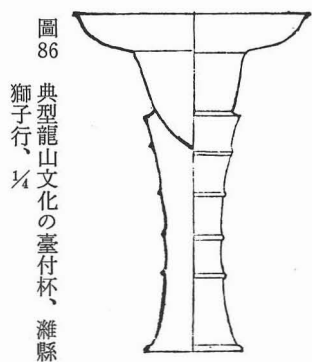
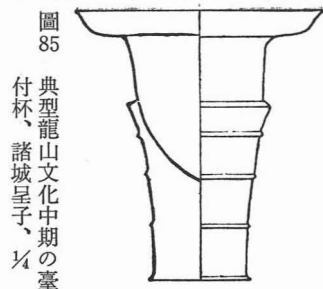


圖82 典型龍山文化の臺付杯、濰坊姚官莊，高 17.5 cm

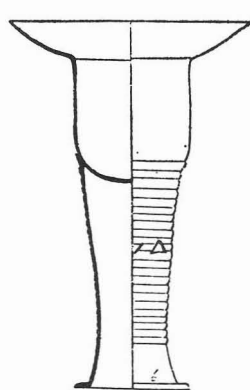


圖84 大汶口文化晩期の臺付杯、臨沂大范莊， $\frac{3}{0}$

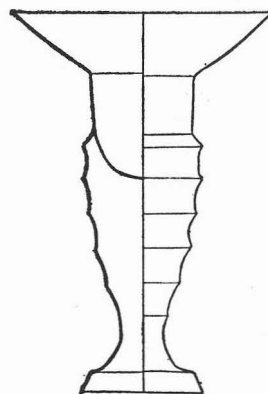


圖83 典型龍山文化中期の臺付杯、日照東海峪， $\frac{3}{10}$



圖91 良渚文化の豆，杭州良渚



圖90 良渚文化の豆，杭縣良渚

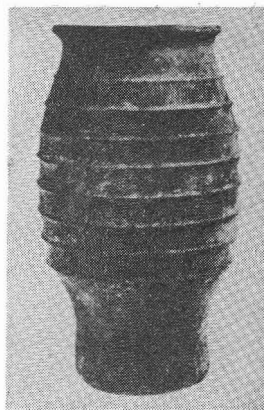


圖89 典型龍山文化の
甕，日照兩城鎮

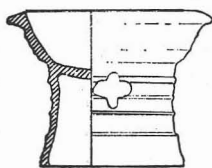


圖94 二里岡下層期の豆，
鄭州西城墙，1/6

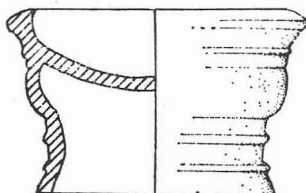


圖93 二里岡上層期の豆，鄭
州花園路，1/4



圖92 二里岡上層期の豆，鄭州
白家莊，高 11cm

二里頭文化風に翻案して表現したのが圖81だと
言ふことができる。

以上圖75の婦好墓の出土品、圖76のブリティ
シュ・ミュージアム所藏品に見る突出部のある
環と全く同じものはどこにも見出すことができ
なかつたが、突出部のある環といふ點に後退す
れば、類例は紀元前第三千年紀末から第二千年
紀の前期にあることが知られた。

右の考察によつて問題の遺物もその邊の時期
のものではないか、といふヒントを得れば、こ
れはもう大體わかつたやうなものである。圖75
で中間に作り出された環の上下には、斷面U字
形の浅い横槽がめぐる。このやうな横槽は圖82
に引いた濰坊姚官莊出土の卵殻黑陶に見出され
る。同様な横槽紋のもう少し粗いものは圖83の
典型龍山中期の東海峪上文化の例があり、細い
ものでは圖84の臨沂大范莊出土の大汶口晩期の
もののやうな例もある。圖75の玉器は極めて薄
手の作りであることが注意されてゐる。この横

槽紋をつけた玉器は、卵殻土器のやうな薄手の器物を尊重した文化の所産とすれば、その作りの薄手である點もよく理解されよう。

圖75と近い型式をもつ圖76の方は筒狀の部分が間隔を置いた細い凸線の弦紋で飾られる點に特徴がある。このやうな弦紋はやはり龍山文化の黒陶に見出される。圖85は諸城呈子第二期文化中期の遺物で、典型龍山中期に當る。圖86は濰縣獅子行の出土で、右は三期、左は四期でいづれも龍山文化、圖88は同地の採集品である。同様な弦紋は豆以外にも同時期の黒陶に見出される。圖89はその例である。圖90 91は良渚遺蹟の出土品であるが、やはり同様な弦紋が見出される（なほこれらと一見相似た弦紋は圖92—94に引いた殷代の土器にもあるが、これらと龍山のものとの相違については五六頁に記す）。

圖76の方は圖75のやうな薄手の作りでない點、また圓盤に作り出された突出部の形も圖75のものと違ひがある點からみて、それと同じ文化の所産ではないにしても、やはり龍山文化の系統に屬する文化のものであることは間違ひあるまい。

圖76の安陽小屯一八號墓の出土品は、弦紋をつける位置、その密度も圖75 76とは異なつてをり、筒狀の部分に對する圓盤の直徑の比率にも相違がある。恐らく前二者におくれるものと考へられるが、年代の參考になる比較の對象が見附からないので、その時代については保留しておく。

この圓盤付器臺と呼んだ器の用途であるが、先にこれと比較した龍山文化の臺付杯（圖83—87）の作りは示唆に富む。杜在忠の注意する所であるが、圖83—87のやうな臺付杯は、杯の部分と臺の部分とを別々に作り、仕上げの磨ぎをかけてから接ぎ合せたものであるといふ。圖84のやうなものであれば、薄手の胎土であるため、一度に作ると粘土が軟い内は臺の方が重みでもたないから、といふことでこの作り方も説明できるであらうが、圖83、85—87のやうに上の容器の部分が臺の中に深く入り込んだ作りの場合は別様な説明が必要と思はれる。これらは尖底乃至圓底の杯形の容器を器臺の上に載せた形である。この形は同時代に土器以外の材質の杯を、器臺の上に置いて使ふ風があり、それを土器で作つたのがこれらの形であると考へればよく説明がつくと考へる。さうすると、それらほど丈は高くないが、圖82或いは圖85の土器の臺の部分と同様、上下が多少開いた

形をもち、それらと同じ紋様で飾られた圖75 76は、それらと同様杯と組合せ、杯の臺として使はれたのではないかと思ひ至る。圖76の上部に小さい孔があるのは、圖82—87の黒陶と同じやうに、その上に杯を固定する方式が採られることがあつたことを示す、と解されるのである。

圖82—87のやうな卵殻黒陶の臺付杯につき、前引の杜在忠論文はそれが墓中において他の土器と混らず、別に置かれてゐることから、それが特に重要なものと認められたものと知られ、またそれらはどの墓にも副葬されるものではなく、比較的大きな臺のみに見出される所から、これらが禮に使はれた器に違ひない、と言つてゐる。この型式の臺付杯は禮に使はれる重器であつたからこそ、特に財力のある人間はその臺に玉製品を使ふことがあつたのだ、と考へられるのではなからうか。

他に、この節で扱つた圓盤付器臺と關聯があるかと思はれる玉器を引いておく。圖95に掲げたロイヤル・オンタリオ博物館の藏品である。圖21に引いた箍のはまつた腕輪狀のもの一方の口に、透し彫の圓盤を作り出したといふ形である。拓本と下の寫眞に見られるやうに、圓盤のある側の孔の縁から孔の内壁に通る小孔が五つ穿たれてゐる。この器の透し彫のある圓盤狀の部分とそれにつづく腕輪狀の部分の小口には、拓本に見るやうな細かい線が刻まれてゐる。この細線の紋様の中で、孔の縁に沿つて刻まれた渦卷と、それを繋ぐ斜線とから成るものは特徴的である。これと近いものといふと、圖96の常州武進寺墩出土の良渚文化の琮に刻まれたものが思ひ起される。然し圖に見るやうにかなり不規則な、整はないものである。良渚文化の他の例、例へばフリア美術館のD字形器に刻まれた神像⁶²に見るのも全く同様な不規則なものである。問題の刻線と最も近いものといふと、圖97に引いたブリティッシュ・ミュージアム藏の鬼神形玉器の頭上の屋根形の部分に刻まれたものである。圖95のものは渦卷と間に入る斜めの線が別々に獨立のものとして刻まれてゐる點、圖97のものがS字形渦紋として意識されて刻まれてゐるのと違ひがあるのであるが、兩者とも刻線は等間隔に引かれ、整正且つ規則的な印象を與へる點からみて、同じ文化の所産であると認められよう。圖97の鬼神像は先に記したやうに山東の典型龍山文化に屬するものである。圖95も同じ文化のものであることが知られた。

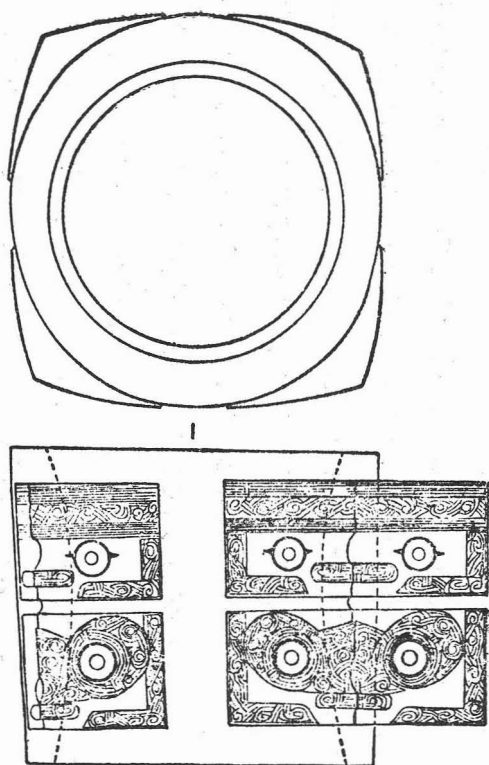


圖96 良渚文化の琮の鬼神像，常州武進寺墩
高 7.2cm

圖97 典型龍山文化の鬼神頭形玉，Courtesy
of the Trustees of the British Museum,
高 4.5cm

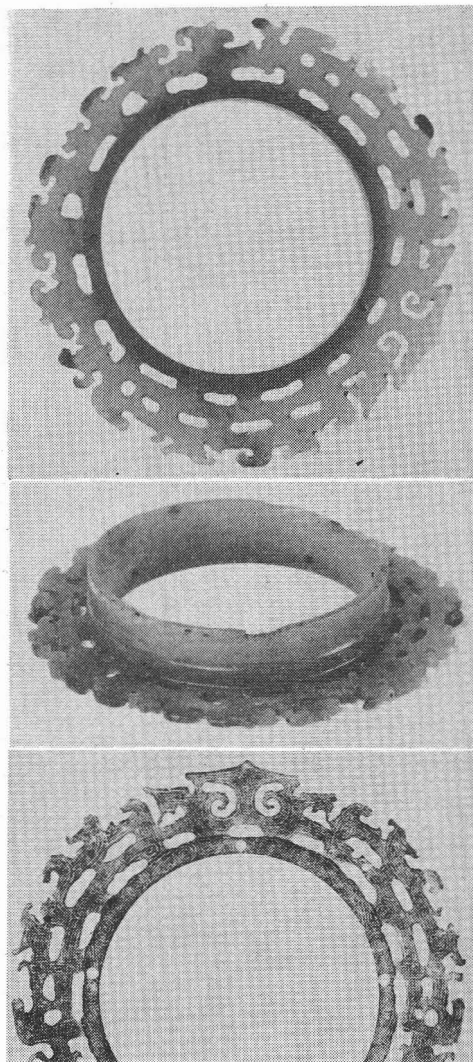
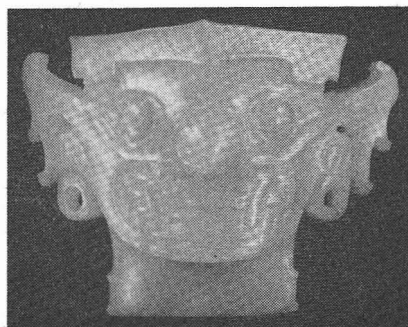


圖95 典型龍山文化の圓盤付器臺，Courtesy
of the Royal Ontario Museum,
Toronto, Canada, 圓盤徑 8.2cm



さて圖95の遺物であるが、圖95上、中圖の寫眞を見ると、次節に引く器臺のやうにも見える。然しこのやうな形で使つたのでは、圖95下圖の拓本に見るやうな切角の刻紋が見えなくなつてしまふ。當然これは透彫の圓盤が上になるやうにして使ふものと考へねばならない。さうすると圖7576の、圓盤から上を切り取つたやうな形に使ふことになるが、この器では圓盤から下が低過ぎ、また下擴がりにもならず、器臺としては不安定であらう。この圖95の器は、木か何かで作つた筒狀の器臺の中腹に固定し、圖7576のやうな形になるやうにして使つたのではあるまいか。一案として提出しておきたい。

(13) ただの器臺

圖98及び99のやうな玉器が婦好墓の報告書に夫Ⅰ式及びⅡ式器座と呼ばれてゐる。日本語でいふ器臺である。圖98の方については報告書に、孔の口は外側が高く、弧狀に内に向つて傾斜し、下の鏢狀の部分は比較的薄く、八個の突起がある。下の面は平らで、置くと坐りがよく、器臺らしい、と記される。⁽⁶⁴⁾直徑一一・三、孔徑八・六、高〇・七cmである。圖99の方はいづれも下擴がりの圈足のやうな形で、上縁近くに等間隔に三つの小孔がある。右のもので高一・七、徑六・七、六、肉の厚さ〇・四cmである。⁽⁶⁵⁾

圖98の方は下の鏢狀の部分の縁に突起を作り出してゐる點、前節で引いた紀元前三千年紀後期から第二千年紀前期の遺物を思ひ起さしめる。恐らくその邊の時代のもものと推定される。圖99の方は密な弦紋をつけるが、そのやうなものは圖76にもあつたが、時代不詳とした圖77にも見出される。實物を手にとつて觀察すれば何か手掛りが得られるかも知れないが今はそれも協はない。ただその形は圖75の下部と似通つてゐるやうに思はれるので、これも一應殷後期のものではないと見てここに引いた。

玉製品ではなく、土器の器臺は仰韶文化からある。圖100101は夫々廟底溝仰韶文化、三里橋仰韶文化のもの。滑車形をなす。圖102は寶雞北首嶺の仰韶文化のもの。仰韶文化中でどれが何の段階に屬するかはわからない。圖102下は圖98と近い形を持つ。圖103は巫山大溪の出土。これも大溪文化中の位置づけは不明である。圖104は大汶口の出土で早期に屬する。直徑一二cm。象牙

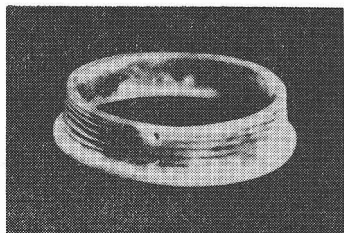


圖99 玉製器臺，婦好墓，上，徑 6.7
~7.6 cm，下，徑 7~7.6 cm

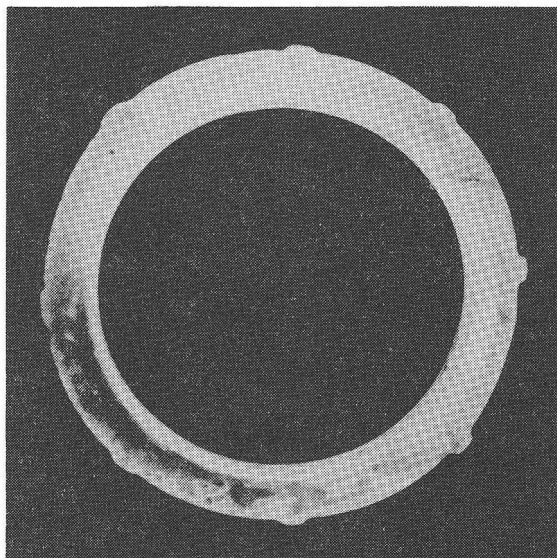


圖98 玉製器臺，婦好墓，徑 11.3 cm

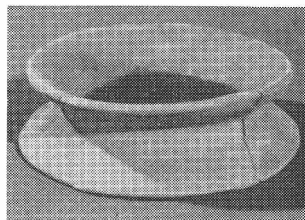


圖102 仰韶文化的器臺，寶雞
北首嶺，上，高 4 cm，
下，高 3.9 cm

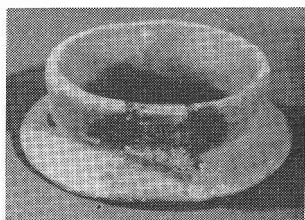


圖101 三里橋仰韶文化的器臺，
三門峽市三里橋，圖 1/4

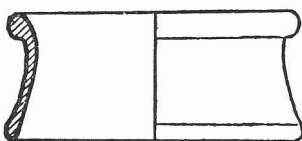


圖100 廟底溝仰韶文化的器臺，
三門峽市廟底溝，圖 1/4

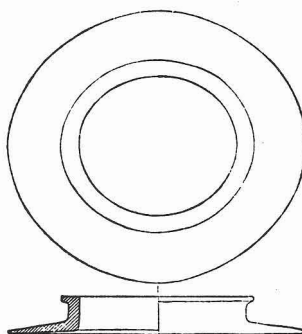
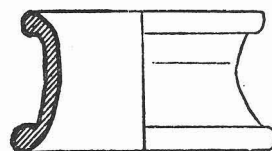


圖104 大汶口文化早期的器
臺，大汶口，約 1/3

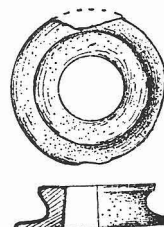


圖103 大溪文化的器臺，
巫山大溪，7/10

製で琮と呼ばれるが、形だけから言へば今問題の器臺に近い。後に15節に引く婦好墓の圓錐形飾の中には、紋様において大汶口の遺物と似通つたものがある。圖98 99あたりの器臺も差當り圖104のやうなものの傳統を傳へるものではないかと推測される。

(14) 「Ⅲ式琮」、「琮形器」

婦好墓の報告書で圖106—109のやうな玉器がⅢ式琮、圖105のやうなものが琮形器と呼ばれてゐる。これらの内、圖106以外の器にはいづれも報告書で蟬紋と呼ばれる紋様が作りつけられてゐるが、その形は殷後期の青銅器などに見ない形を持つ所から、これらの器が明かに殷後期の作ではないことが知られる。

これらの玉器のうち、圖105には先に證した二里頭文化のものであるC字形渦紋と同系の渦紋が刻まれてゐて、これらが全體その時代に屬することが知られる。これらに刻まれた渦紋は先に引いた圖47、160三つ目と比べ細工が幾分難である所に違ひがあり、それが時代の差を示すものか、或いは同時代の職人の技術の差を示すのか、今の所明かにし難いが。

圖105がその渦紋によつて二里頭期のもものと知られることにより、またそこに刻み出されたやうな杏仁形をなし、その圓い側寄りに目を二つ入れた形の圖像もこの時期に屬することが知られる。

圖107—109の蟬紋と呼ばれる紋様は目のある側が直線的になり、また圖108では圖105の同式の紋様にあつた中心の縦の二本の平行線と、目の下を限る線が交叉する直線で表はされ、圖109では側面の線が直線的に表はされて全體が二等邊三角形に近い形に表はされるなど、簡略な表現が目立つ。

さうするとこれらは先に見た圖105のやうな二里頭期のものが型式化したもので、年代的にもそれより降るものと考へられるであらうか。筆者はさうではないと考へる。圖107 108では蟬紋と呼ばれた圖像を挟んで縦の條紋が刻まれてゐるが、同様な構圖は圖110の玉斧にある。大きな目を持つた鬼神像を挟んで縦の條紋が彫られてゐる。この器は先に見たごとく、典型龍山文化に屬する。典型龍山文化といへば圖111 112のやうな土器が思ひ起される。圖111は胶縣三里河第二期に屬し、これは典型龍山文化

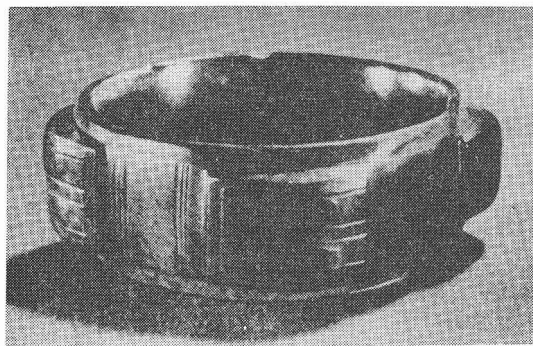


圖106 「Ⅲ式琮」，婦好墓，拓 3/5

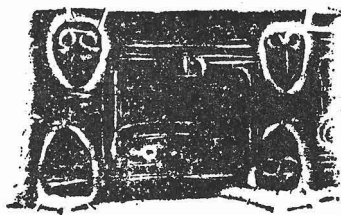
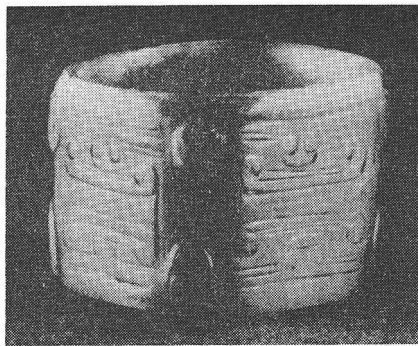


圖105 「琮形器」，婦好墓，拓 3/5

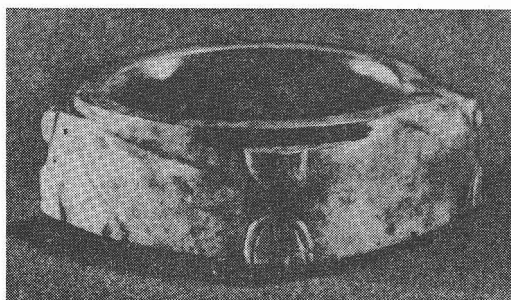


圖108 「Ⅲ式琮」，婦好墓，拓 3/5



圖107 「Ⅲ式琮」，婦好墓，拓 3/5

中期とされる。⁽⁶⁷⁾ 圖112は山東曹縣華塚集の出土で、龍山文化のものである。圖107 109の縦の條紋がこのやうな龍山文化に使はれたものに屬し、この器がやはり典型龍山文化のものであらうことが推定される。

この年代判定を裏づけるものは、それらの器につけられた所謂蟬紋である。殷代の蟬紋といふと、圖113に示したやに、長いハート形の胴體の上に二つの大きな目のある頭部が重なり、その上にトランプのスペード形の鼻先が附いたものであり、ここに問題の紋様は蟬と呼ぶにはあまりにも身體

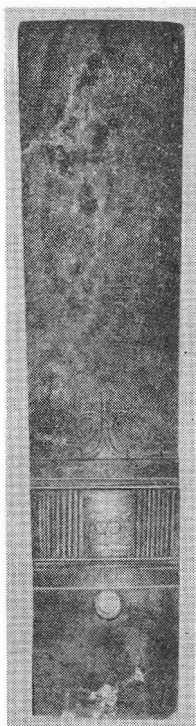


圖110 典型龍山文化の玉斧，
長 33.1 cm

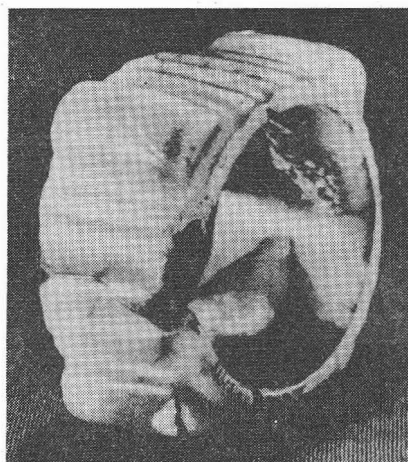


圖109 「Ⅲ式琮」，婦好墓，拓 3/5



圖112 典型龍山文化の單耳杯，曹縣
莘冢集，高 10.5 cm



圖111 典型龍山文化中期の單耳杯，
膠縣三里河

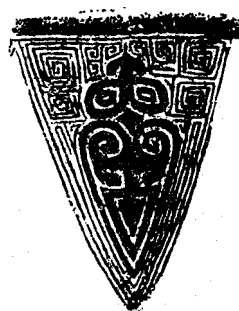


圖113 殷後期の蟬紋，方料，婦好墓

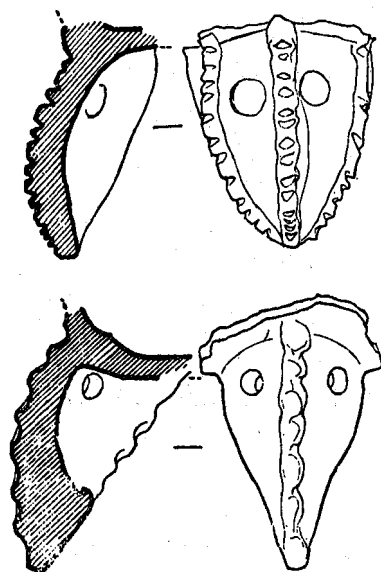


圖114 典型龍山文化の鼎足の「鬼臉」，濰坊姚官莊，2/3

目の間に多く縦の稜が入るが、玉器ではただの縦線で簡略に表はされる、といふ相違があるが、土器であれば粘土の紐を貼りつけるだけで簡単に出来る稜も、玉器で作らうとすると大變な手間がかかることを考へれば、この相違も當然のことと理解されるであらう。

以上の考察により、圖107—109の玉器は典型龍山文化に屬すると見るのが妥當であると考へられる。

なほこれらの器の用法であるが、圖105 106について、一方の口の方は圓筒が上に出るが、反對側は出ない、と報告書に記されることが注意される。これらの器は、例へば腕輪といったやうなものではなく、寫眞に見るやうな形に置いて使つたものと推測される。他の器は兩側とも同じ形になつてゐると記されるのであるが、高さとか外周の紋様の附け方等形が近い所から、それらも右に引いたものと同様に使はれたのではないかと推測される。然し用法については兩方の端がどのやうな具合になつてゐるか、實物を觀察してから判斷すべきであらう。

時代は降るが安陽侯家莊一〇〇二號墓、一〇〇四號墓出土の殷後期の大理石製品に圖115 116のやうなものがある。四方に對蹠的な形で四對の羊角犧首を刻み出してゐる。犧首のこの配置は圖105 108 109と同方式である。これらの龍山文化から二里頭文化へ

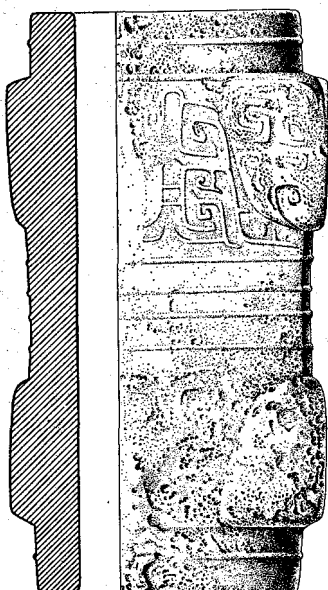
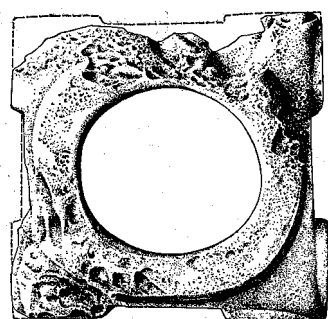


圖116 殷後期の大理石琮，安陽侯家莊1004號大墓，2/3

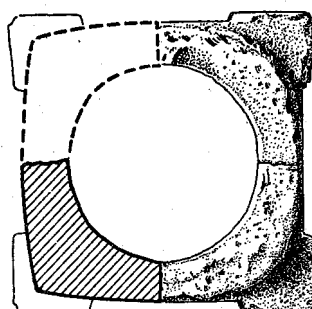
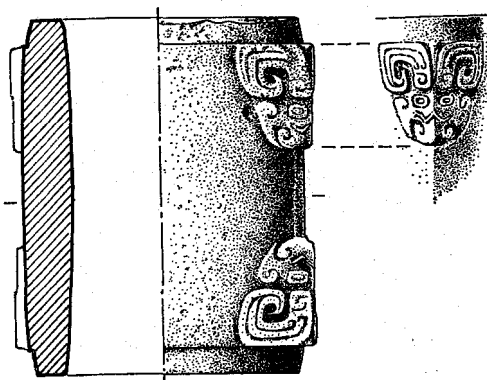


圖115 殷後期の大理石琮，安陽侯家莊1002號墓，1/3

と系統のたどられる圓筒形の器の傳統に倣ひながら、鬼神の種類は殷後期のものに代へて作つたのがこれであると解せられる。⁽⁶⁹⁾

(15) 「Ⅰ式及びⅢ式・圓箍形飾」

「圓箍形飾」とは圓筒形の玉器で、何か木の柄のやうなものにとりつけた飾り、といふ解釋による婦好墓の報告書の命名であるが、その用途は全部同じといふわけではなからうと記される。⁽⁷⁰⁾用途については必ずしも明かでないため、別に新しい名稱を考へることは止め、報告書の名を踏襲することにする。Ⅰ式とされるのは圓筒狀で太細がないもの。極く少數が目釘孔をもつ。⁽⁷¹⁾Ⅲ式とされるのは圓筒形に近いが一方の端が他より僅かに太いもの。然し差は二mmを超えない。多く目釘孔があり、一

端の近く、または中間にあるものである。⁽⁷²⁾ ここには繁雜を避けるため兩種を一緒にとり上げておく。

圖117は特異な弦紋をつけるもの。即ち、拓本と寫眞とを併せ見るとわかるやに、凹線の弦紋が一定の間隔で刻まれるのであるが、その凹線のある部分が削り残されて地よりも若干高くなつてゐるのである。假に天井川式と呼んでおかう。圖119は出土地不明の遺物であるが、これも同様な天井川式の弦紋をつけた圓箍形飾である。この特異な天井川式の線はまた圖120 121の玉斧に見出される。そこに刻まれた翼を擴げた鳥、耳環をつけた鬼神面は今迄何度も引いたやうに、典型龍山文化のものである。同じ天井川式の線をつけた圖117 118の圓箍形飾も、凡そその時代に年代づけることが許されるであらう。

別の見方をすれば、この天井川式の弦紋は、圖75に刻まれた横槽の境界をなす突出部に刻線を加へたもの、といふことができる。圖75は別の證據によつて典型龍山文化のものと考えたものである。右の年代づけを傍證するものと言ふことができよう。次に別の類の弦紋をつけたものとして圖122—125のやうな類がある。何本かの平行した弦紋の束を、これと直交する線分で等

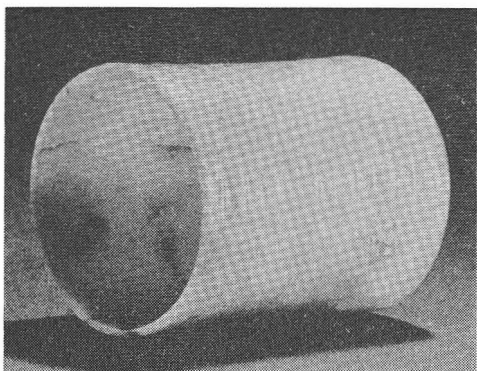


圖117 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

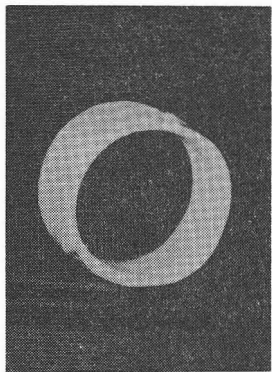
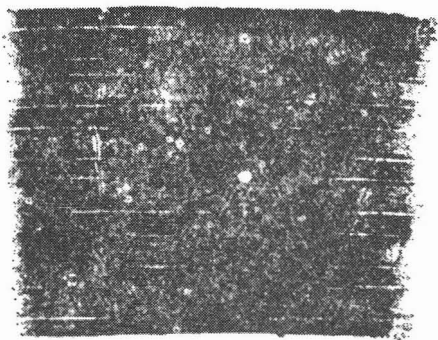
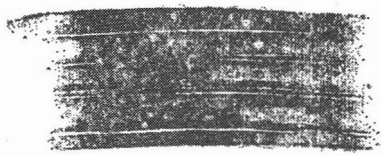


圖118 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5



間隔に區切つた形である。圖126 127は腕輪とされる器であるが、同式の弦紋で飾られる。これらと同じ紋様で飾られる器に圖128がある。「墜飾」、即ち腰に吊す垂飾乃至器物の柄端の飾りとされるものである。この器には先に典型龍山文化の鬼臉と同じもの考へた紋様がつけられてゐる。右に引いた區切り入りの弦紋の年代をこれによつて知ることができる。これは一例だけであるが、同様な鬼臉の飾られた圖129 130の墜飾や圖131の圓箍形飾には區切りの入らない弦紋が附けられてゐるが、弦紋だけに注目して比較すれば圖122—128のものと全く同式で、これに區切りを入れれば圖122—128と區別するのは困難と思はれる體のもので

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

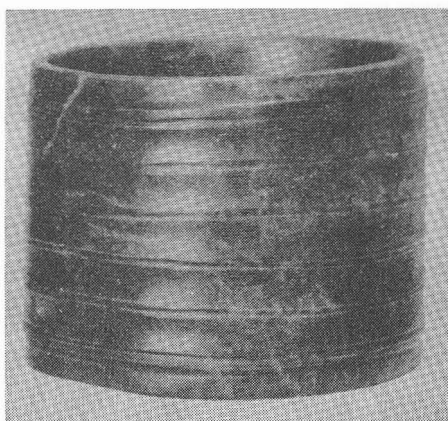


圖119 天井川式の弦紋のある「圓箍形飾」



圖120 典型龍山文化の天井川式の凸帶のある玉斧 Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington D. C.



圖121 典型龍山文化の天井川式の凸帶のある玉斧

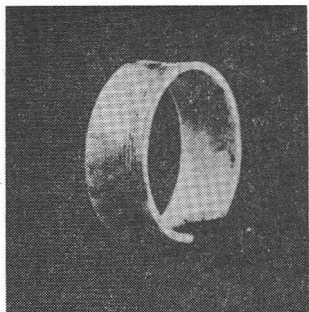


圖123 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

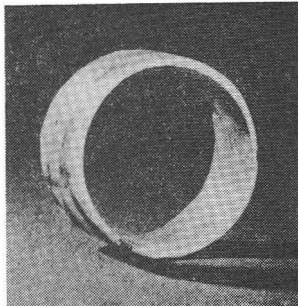


圖122 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

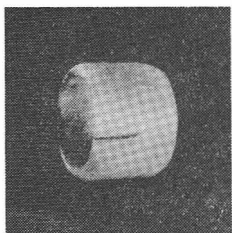


圖125 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

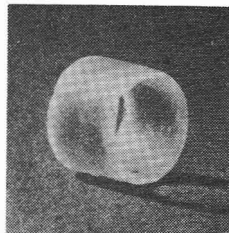


圖124 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

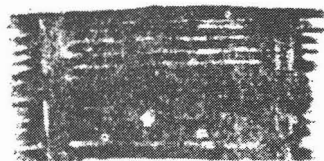
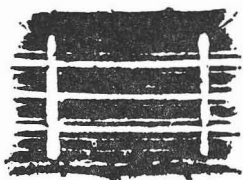


圖127 玉製腕輪，婦好墓，拓 3/5

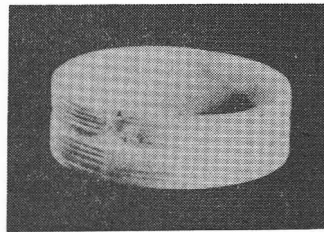


圖126 玉製腕輪，婦好墓，拓 3/5



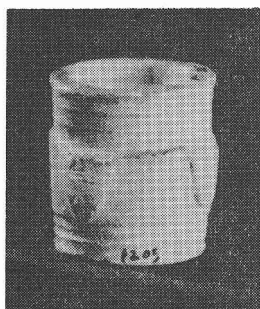


圖129 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

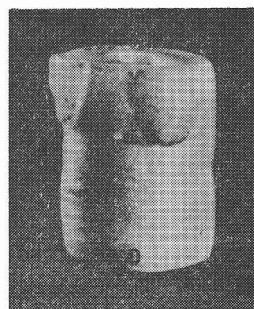
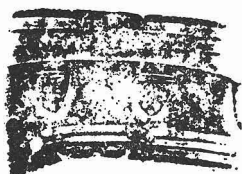


圖128 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

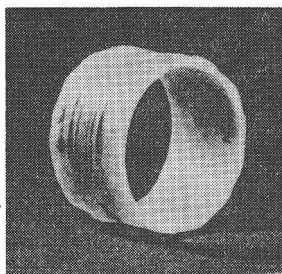
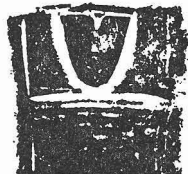


圖131 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

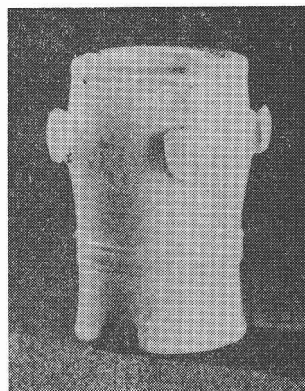


圖130 「玉墜」，婦好墓，高 4.7 cm

ある。問題の區切り入りの弦紋が鬼臉と同時代、典型龍山文化に年代の一點が押へられるものであることは疑ひない。圖 125 131 に見るごとき、二本の突線の弦紋を一単位とする弦紋、或いは圖 128 129 に見るやうな何本か束になつた弦紋で飾られる器として、圖 132 — 139 が婦好墓の出土品から拾ひ出される。これらの遺物の年代についても同じことが考へられるのである。

他に圖 140 141 143 は前節、圖 107 109 に引いたのと同様な條紋が附けられる圓箍形飾、玉墜の例である。これらも同じ時代に歸せられよう。圖 142 はこれらとはまた相違があるが、そ

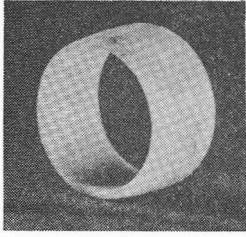


圖133 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

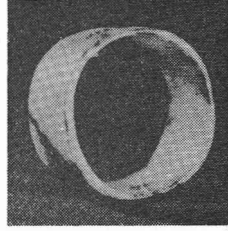


圖132 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

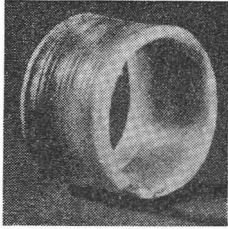


圖135 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

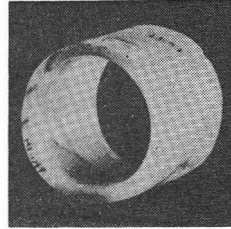


圖134 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

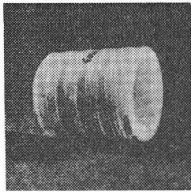


圖137 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

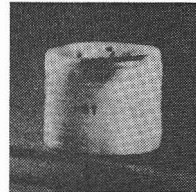


圖136 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

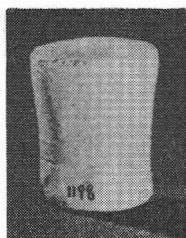


圖139 「玉墜」，婦好墓，拓 3/5



圖138 「玉墜」，婦好墓，拓 3/5

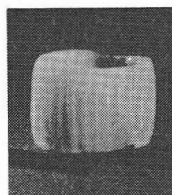
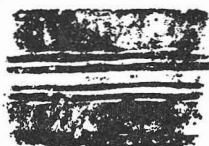


圖141 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5



圖140 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

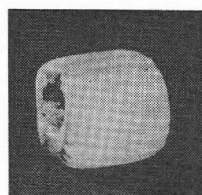


圖143 「玉墜」，婦好墓，拓 3/5



圖142 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5



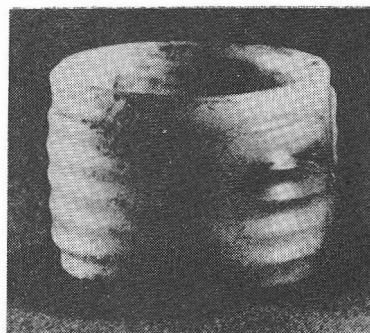


圖144 「琮形器」，婦好墓，拓 3/5

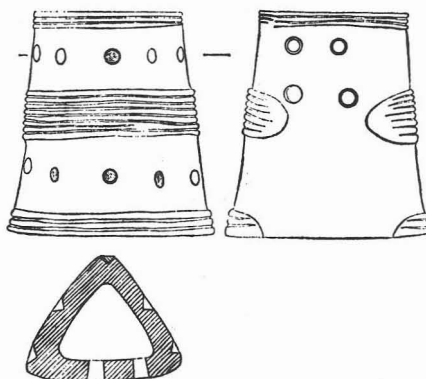
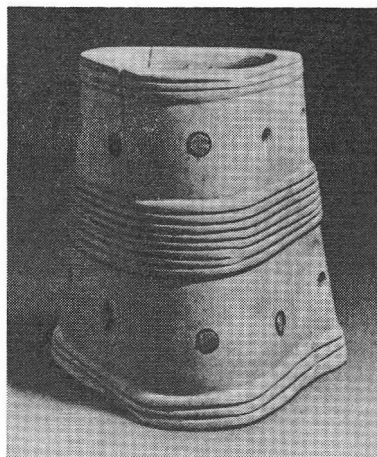
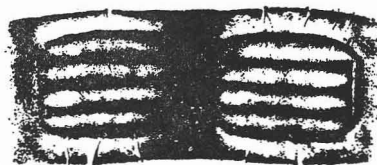


圖146 大汶口文化晩期の骨飾，圖約 1/3

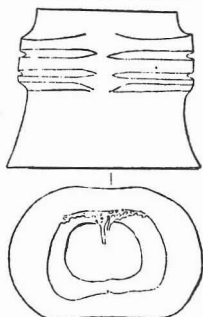


圖145 大汶口文化晩期の骨飾，
圖約 1/3

の縦線は圖136の弦紋を縦にしたものと見ることができ。これも同時代と認めて差支へなからう。

圖144は婦好墓から一例しか出てゐないが、また變つた紋様が附けられてゐる。報告書では琮形器に分類され、記述によると四隅に凸稜があり、その上に平行の陰線五本を彫る、とある。

これと近い紋様を持つ遺物として圖145の大汶口出土の骨飾が思ひ起される。長骨を輪切りにして二面に突出部を削り出し、そ

こに平行線を刻んでゐる。大汶口文化晩期の墓の出土である。この遺物は突出部が二面であるに對し、圖144は平行線を刻んだ突出部が四面であるといふ違ひはあるが、兩者が同じ系統のデザインであることは疑ひない。圖146の遺物では平行線を刻んだ突出部は切れ目が一ヶ所あるだけであるが、これも同類と言へよう。これも大汶口文化晩期の墓の出土品である。

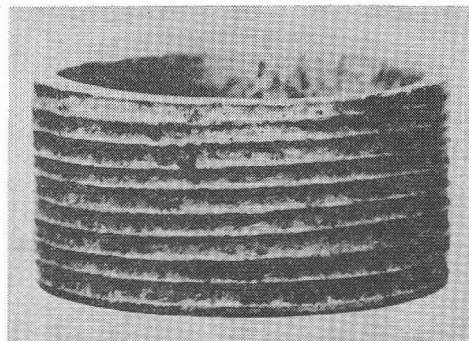


圖147 典型龍山文化の圓筒形玉器

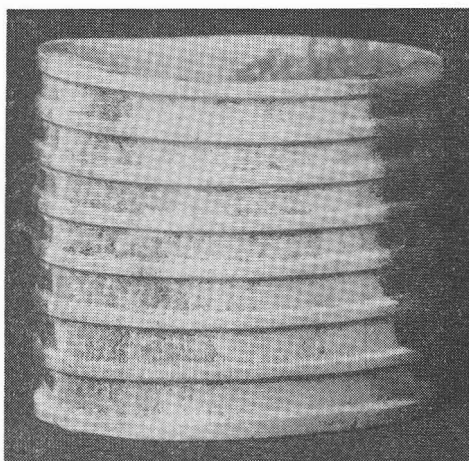
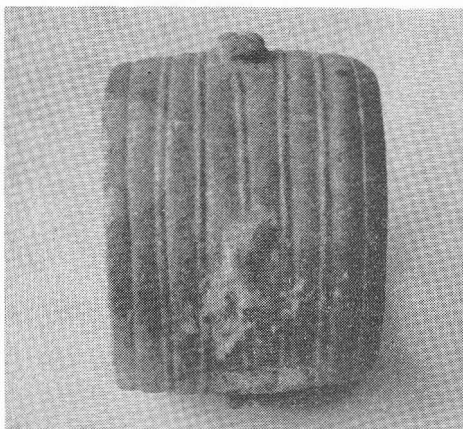


圖148 典型龍山文化の圓筒形玉器, Fogg Art Museum, Harvard University, Grenville L. Winthrop Bequest, 徑 6 cm



圖150 殷後期の圓筒形大理石器, 京都大學文學部博物館, 徑 6 cm



圖149 典型龍山文化の圓筒形玉器, Fogg Art Museum, Harvard University, Grenville L. Winthrop Bequest, 徑 5.7 cm

圖144の婦好墓の出土品が、ここに引いた骨器と同様、大汶口文化晩期の遺物であるのか、或いはそこに附けられたやうな紋様が大汶口文化から典型龍山文化に引續き使はれたもので、この遺物は他の婦好墓出土の多數の典型龍山文化の玉器と同様、その時期に由來するのかどうかの問題は、これだけの材料では差當り決めることができない。然し圖144や145のやうに圓筒の外側に突出部を設け、そこに粗く平行線を刻んだ紋様を圖122—126のやうに整正な平行線の束をこれと直交する線で中斷する紋

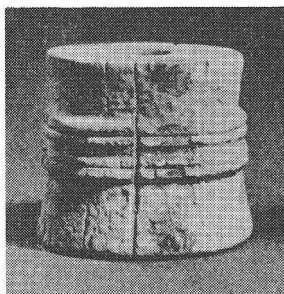


圖151 大汶口文化晩期の象牙製筒，大汶口，圖約1/3

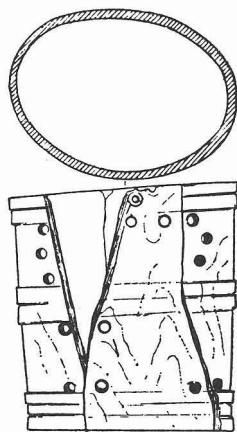
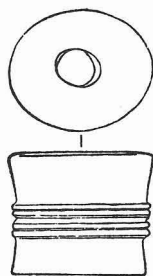


圖153 大汶口文化の象牙製筒，曲阜東魏莊，1/4

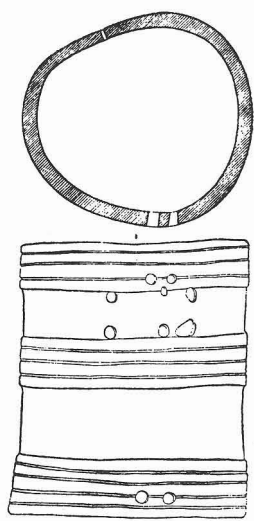


圖152 大汶口文化晩期の象牙製筒，大汶口，圖約1/4

様の原型と考へることができれば、後者は鬼臉紋との同伴（圖128）によつて確かに典型龍山文化のものと認められるのであるから、圖144のやうな原型のものはそれよりも時代が遡り、大汶口文化晩期のものと考へた方がよいのではないか、といふことになると思はれる。

次に婦好墓の出土品ではないが、圓箍形飾

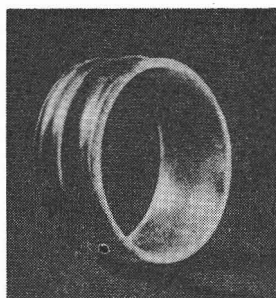


圖155 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

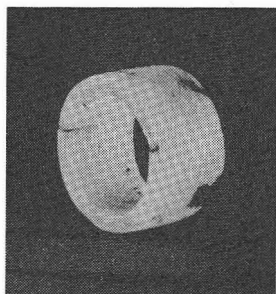


圖156 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

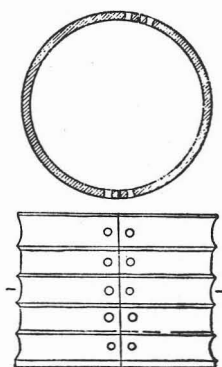
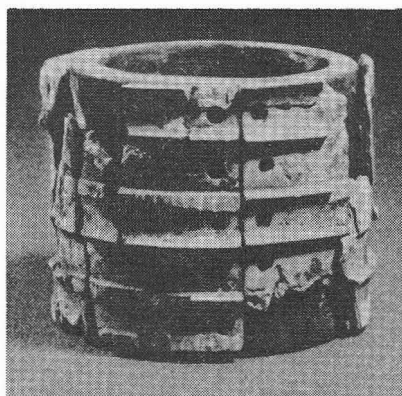


圖154 大汶口文化早期の象牙製筒，大汶口，圖約 1/3

として圖147—149のやうな遺物が知られる。12節に引いた圖75 76と同様、龍山文化の卵殻黑陶と横槽紋、弦紋において共通する筒狀の玉器である。圖147は梅原末治氏が寫眞を入手した時代にウインスロップの所藏であつたらしいが、現在そのコレクション中ではなく、寸法、記述は知られない。圖148は控え目であるが一端に圖76にあつたやうな鐙狀の部分がある。直径六、高五・四、厚〇・六⁷³⁾cm。圖149は一方の小口の近くに一つの孔がある。直径五・七、高三・三、厚〇・三cm。これらは婦好墓の圓箍形器と同じやうな大きさで、孔が一方にある例もⅢ式とされる圓箍形飾にある。典型龍山文化にはまたこのやうなものもあつたことが知られる。

圖150は京大文學部博物館藏の大理石製品。周圍に蟬が刻み出されてゐるが、その表現によつてこれが殷後期のものと判

定される。この器にも弦紋が刻まれるが、この弦紋は同じ突線の弦紋でも圖148 149等のものと相違がある。即ち、圖148 149では弦紋は地の圓筒から完全に突線として飛び出しているものであるが、圖150のものは突線の兩側が斜めに彫られてゐるが、圓筒の地はこの突線と同じレベルにある（圖150中）。この技法は殷後期の玉器に廣く使はれるものである。それに對し、圖148のやうに突線の周圍の地を平らになるまで磨るのは龍山文化の玉器に使はれる（例へば圖12）もので、この點圖150に使はれた弦紋の技法は蟬で判定される年代と矛盾しない。圖92—94は陶豆に使はれた弦紋であるが、龍山のものに比べてぎりつとせず、何か太めで鈍い印象を與へる。同じ好尚の反映と認められる。

さてこの圖150の遺物であるが、この器は上の寫眞で言つて、上の縁は外側は圓く面を取られてゐるが、下の寫眞に見るやうに下の縁は平らに磨られ、上の寫眞のやうに置くと坐りが良いやうに作られてゐる。この器が上の寫眞のやうな形で使用した

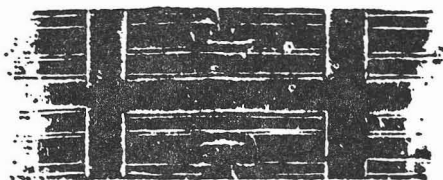
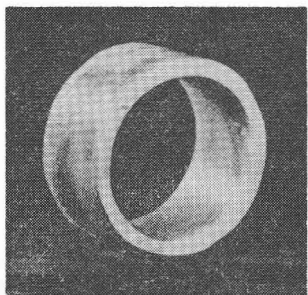


圖157 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

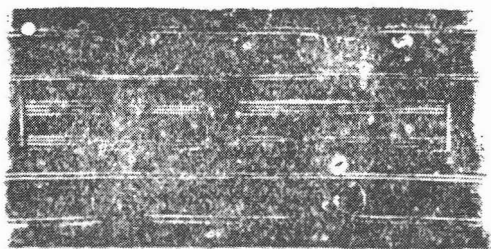


圖158 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

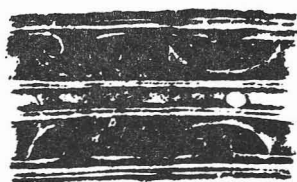


圖159 「圓箍形飾」，婦好墓，拓 3/5

ものであることが知られる。この器の内面は朱が浸みて赤味を帯びてゐるが、下から數ミリは白色のままで（下の寫眞）、何かの材質の底板で塞がれてゐたために朱に染らなかつたと解される。圖147—149の器の上下の縁に圖150で觀察されたやうな作りの違ひがあるかどうかは不明である。⁽⁷⁶⁾

先に圖144の婦好墓出土品を大汶口文化の骨器と比較したが、圖134或いは138に見るやうな、何本かの平行線の束を刻み出した紋様は、大汶口文化晩期の象牙製の筒に使はれてゐる。圖151—153のごときである。圖151は高さ四・八cmの厚い筒、圖152 153は夫々高一四・六、一二・八cmの大ぶりの割に薄手の作りで、用途は必ずしもここで問題の圓箍形飾と同じかどうか明かでない。圖151と152は大汶口遺蹟の大汶口文化晩期墓、圖153は曲阜東魏莊の大汶口文化の墓の出土である。他にまた圖148のやうな突線の

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

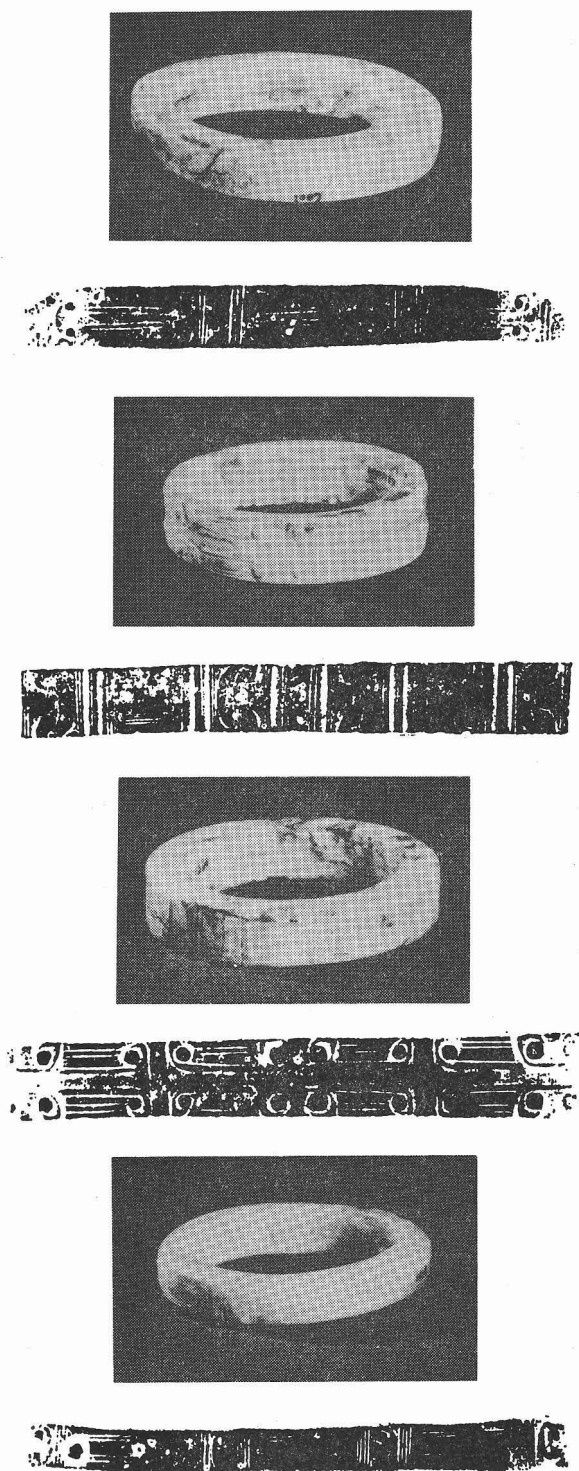


圖160 玉製腕輪，婦好墓，拓3/5

弦紋を疏らに刻み出した紋様も圖154の大汶口の象牙製の筒に見出される。これは大汶口文化早期墓の出土である。

他の材質で作つたものとはいへ、このやうに大汶口文化に相近い紋様を持つたものがあるとすると、先に典型龍山文化に年代の一點を求めた遺物の中には、大汶口文化まで遡るものがあるであらうか。その可能性は一應考へておく必要があるであらう。然し細工を比べてみると、大汶口の象牙容器の平行線は意外と不整正である點、前に龍山文化に年代の一點を求めたものと懸隔がある。やはりそれらは典型龍山文化を中心とするものと考えた方が良いと思はれる。

もつとも、婦好墓出土の圓箍形飾の中には、圖155 156のやうに粗い細工のものも混つてゐる。これらの遺物の年代が整正なものより遡るのかどうか、といった問題は、材料不足のため保留しておいた方がよさうである。次に圖157—159は、先に二里頭期のものとしたC字形渦紋で飾られた圓箍形飾である。圖160には同じ紋様で飾られた腕輪と一緒に引いておいた。

三 殷文化のものでないことは確かであるが來源の明かでないもの

(1) 松緑石の鳥

圖161に引いたのがそれである。メイクイン種の馬鈴薯を連想させるやうな圓味を持つた形に簡略化された翼と身體に卵形の頭をつけ、一切のディテールの表現を缺いたこの鳥は、一見して殷後期とは異質な様式のものである。圖162 163の軟玉製品はこれと同じ様式を持つた遺物である。出土地の記録はない。これらが如何なる時代のどのやうな文化に屬するものか、將來の考古學的發見に期待する他ない。

(2) 牙飾付の戈

婦好墓出土の玉戈の中には牙飾のついた珍しいものが混つてゐる。圖164 165がそれである。圖164の援の基部のC字形渦紋は先

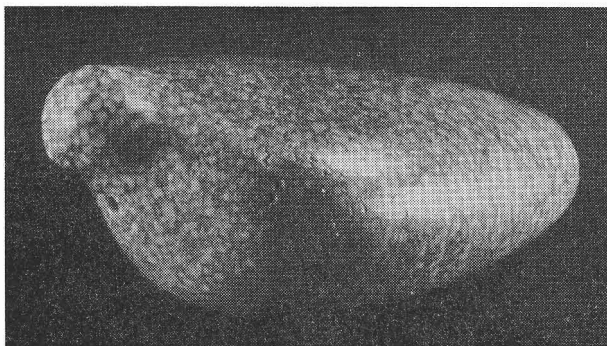


圖161 松綠石の鳥，婦好墓，長 6.4 cm

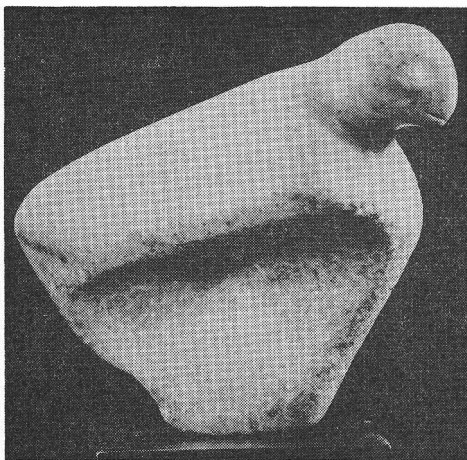


圖163 玉鳥，高 8.9cm, Nelson Atkins Museum of Art, Kansas City, Missouri

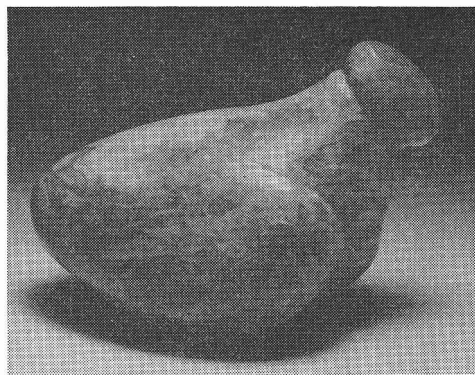


圖162 玉鳥，Asian Art Museum of San Francisco, the Avery Brundage Collection, 高 5 cm

に見た二里頭文化のものと近いやうにも思はれるが、比較してみると線の性質に相違がある。「内」端を飾る枝分れた渦紋も青銅器その他の殷の器物に見ないものである。圖165の鋸の齒のやうな牙飾や、兩隅に突起のついた「内」の形も同様である。發掘のデータがなかつたら、眞偽についてまで頭を悩まさねばならない體のものである。今の所これらの遺物の屬する文化や年代については考へる手掛りを見出すことができない。

以上、婦好墓出土の玉器の中から、婦好よりも古い時期に由來すると思はれるものを拾ひ出し、年代や製作された文化について考察を加へて來た。比較する材料が不十分なため判斷を誤つた所もあるかも知れない。また將來の考古學的發見によつて是正さるべき點も少くないと思はれる。識者の教示を乞ふ次第である（一九八五年四月）。

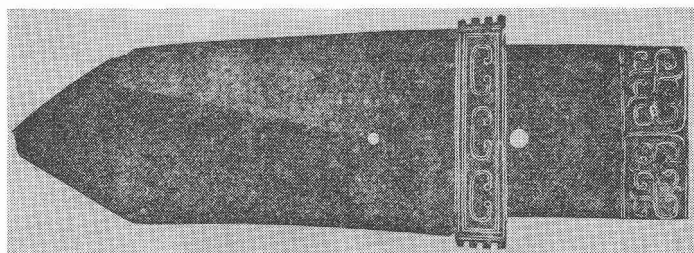
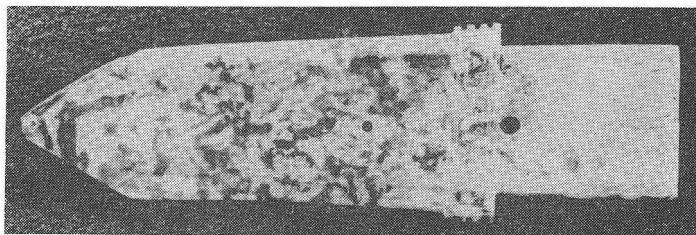


圖164 牙飾付の戈，婦好墓，長 23.2cm

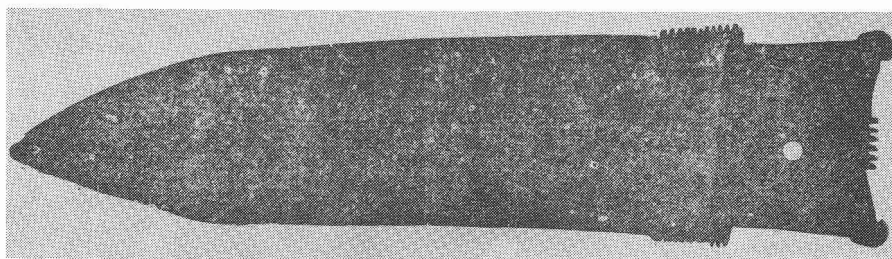
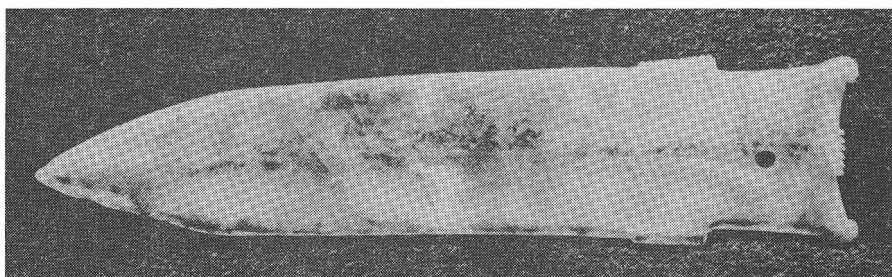


図165 牙飾付の戈，婦好墓，長 29.5cm

注

- (1) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一五頁。
- (2) 同右、三一頁。
- (3) 同右、九五頁。
- (4) 安陽殷墟五號墓座談紀要。
- (5) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一一四頁。
- (6) 殷墟五號墓座談紀要。
- (7) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一四八—一五五頁。
- (8) 殷墟五號墓座談紀要。
- (9) 殷墟五號墓座談紀要。
- (10) 殷墟五號墓座談紀要。
- (11) 殷墟五號墓座談紀要。
- (12) 殷墟五號墓座談紀要。
- (13) 殷墟五號墓座談紀要。
- (14) 殷墟五號墓座談紀要。
- (15) 殷墟五號墓座談紀要。

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

- (16) 一九五六、圖四、下・中にある。頭から頸に沿つて後に長い羽根が垂れ、上端が鉤形になつた線が翼に加へられてゐる點、圖1の玉鳥を思ひ起させる。ただ圖が草卒に描かれてゐて十分確かめることはできない。最上層第一、二層の出土品で、この層出土の玉器類は中原地區の周代の玉器の特徴に近いと記される（同、一九九頁）。掲げられた圖の玉のどれが周代のものに近いと言はれてゐるのかその圖では明かにし難い。
- (17) 殷周時代青銅器に多い所謂圓渦紋を筆者は甲骨文、金文の四字と同等とした（林一九六三、七頁）。その形を玉器で作つたものとしてこの名で呼ぶ。
- (18) 石一九七三、挿圖二〇。
- (19) 梁、高一九六二、圖版二六、7、梁、高一九六五、挿圖二三。
- (20) 遼寧省博物館等一九八四、三二八頁。
- (21) 同右、三二六頁。
- (22) 夏一九八四、四〇七頁。



挿圖1

この遺跡で玉器類が出ることが報告されたのは一九七七年のことである（戴一九七七）。神木縣は陝西省の西北端にあり、北は内蒙古に接し、東南は黄河、長城が縣の西南から東北に横切るといつた邊鄙な所である。一九七七年の報告では採集遺物が報告されてゐるが發掘はされなかつた。一九八一年に試掘が行はれた結果、玉器類の出る石棺墓は大體客省莊第二期文化に相當する住居遺蹟よりも晚く、内蒙古の大口第二期文化に屬することが知られるに至つた（西安半坡博物館一九八三、一〇〇頁）。大口第二期文化は内蒙古准格尔旗馬棚公社大口遺蹟の發掘によつて命名された文化で、大口第一期文化が大體客省莊第二期文化に平行し、大口第二期文化はその大口尊が偃師二里頭文化のものより原始的であるといふことから、客省莊

第二期文化より晚く、二里頭早商文化よりも古い、といふやうに年代づけられてゐる(吉、馬一九七九、三一八頁)。思ふに、客省莊第二期文化とは複数の器種が比較されているからその平行關係はよいとして、二里頭文化とは大口尊が比較されているだけで如何にも頼りない。この文化が客省莊第二期文化からどれ位降るものかは今後の研究に俟たねばならないが、これが紀元前第二千年紀の前半に入るものである位のことには確かに言へるであらう。

(23) 林一九八二、圖一五一二〇。

(24) 夏家店上層文化にもあるが(中國科學院考古研究所內蒙古發掘隊一九八一、圖版六、7、河北省文化局文物工作隊一九六二、圖七、3)時代が西周後期以後に降つてしまふ點不都合である。

(25) 山東では他に龍山・殷中期の泗水尹家城出土のものがあり(山東大學歷史系考古專業一九八〇、圖二、13)、江蘇北部では徐州高皇廟(江蘇省文物管理委員會一九五八、圖版三、9、10)淮陰地區(尹、趙一九六三、圖四、1)の龍山文化のものが知られる。

(26) なほ婦好墓からはもう一個石庖丁形の玉製品が出てゐる(中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一一八、3)。梯形二孔で孔は上寄りに穿けられ、全面を使つて鑲首が線刻されてゐる。この方は殷後期の文化の產品と考へられる。

(27) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一二二—一二四、一四六一—四七頁。

(28) 同右、圖版一二二、2左。

(29) 林一九七九、圖12、13。

(30) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一七六一—一七八頁。

(31) 出土地不明の例では Loo 1950, Pl. 36, 7, Dohrenwend 1971, p. 42 がある。

(32) 戦前に玉器類の發見された廣漢中興公社の遺蹟(關係文獻は馮、童一九七九、注1—6参照)は戦後に何回か調査が行はれてゐる。一九五四年報告された寶成鐵路建設に伴ふ調査の報告は石環その他の

發見物の品目が記されるだけであるが(西南博物院籌備處一九五四、一〇頁)、一九五六年の調査でも(王、江一九五八、二九—三〇頁)、玉器と石環片とが採集され、小杯、斂口盆等の土器は新繁水觀音のものに類似することが認められたが、兩者の共存關係は今後の研究にまつと報告されてゐる。一九六一年の調査では發掘は行はれなかつたが、遺物包含層の觀察によつて文化は單一だと判定されている(四川大學歷史系考古學教研組一九六一、二三頁)。また土器が新繁水觀音と成都羊子山の土臺遺蹟出土のものと同じであることが確認された(同、二三—二五頁)。そして前回に石璧、環の半製品などの存在により、ここが玉石器の製作場遺蹟であると報告されたのに對し、大量の石璧の出土するのは、遺蹟の中心で戦前に玉器の發見された燕家院子から二〇〇mばかり外れた鴨子河(前引、圖一参照)の岸であるから、この石璧は別の文化と關係があることが明かになつた、といふ(同、二七頁)。然しこの石璧に土器等別種の文化遺物が伴出するとは書いてない。同様な石璧は羊子山からも出てゐる(四川省文物管理委員會一九五七、圖六)、やはり同一文化に屬すると見る方がよいであらう。

この遺蹟の年代を考へるに當つて、報告者はここで發見された玉器類が周代のものでなければならぬといふ先入見にとらはれ、新繁水觀音のものと同様な伴出土器の年代との調整に無理をしてゐる(四川大學歷史系考古學教研組一九六一、二七頁)。このことは馮、童一九七九も同様である(三五頁)。この遺蹟は單一文化の遺蹟だといふことが土器によつて確かめられた以上、戦前に出土した玉器類も土器と同時代と考へるのが考古學の常道である。即ち、玉器類もこの土器がそれと同様であると言はれる水觀音の土器と同時代だといふわけである。水觀音の土器は(四川省博物館一九五九、圖三)圓底や平底に特徴のある壺形、杯形の多い一群であるが、それに混つて袋足の盃が報告されてゐる(同、圖三、14)。この土器は俞偉超氏が注意してゐるやうに(俞一九八〇、注37)、似てゐるも

(33) のといへば偃師二里頭の出土品である。偃師二里頭の盃で全體に丈が高いのは二期のもので三期、四期と次第に低くなるが、近いのは三期位のものである(飯島一九八五、圖57。また高、邵一九八一参照)。ただ水觀音のものは上半が口縁の附いた甕形をなすに對し、二里頭のもののは上が如露のやうに小さい口を残して覆はれてゐる點に相違がある。河南省北部と四川省の眞中では遺物の比較を行ふには遠く隔り過ぎてゐるやうにも思はれようが、相似た盃は湖北省中西部、宜都紅花套からも出てゐる(林春一九八四、圖二、1、8)。この方は口の作り、上半部のすらつとした作りが二里頭二期のものと近い形を持ち、一はそれに似るがやや太短かである。俞氏によるとこの文化は湖北省西部、湖南省西北部、四川の三峡地區を含んだ文化圏に屬し、この地區の第四段階の文化に入る。俞氏は二里頭期に中原文化の影響が南陽盆地を経て漢水 downstream、揚子江流域にまで強力に波及したことを證してゐる(俞一九八〇、五頁)。俞氏はこの期の文化を早期巴人文化と呼んでゐる。林春はこの方面の研究を更に一步進めた(林春一九八四)。即ち宜昌地區の文化を層位を參考にして三期に分け、第一期は二里頭文化の早い時期に、第二期は二里頭下層を下限とする時期に、第三期を二里頭上層に當る時期に大體平行すると考へてをり、その考察に前引の盃の型式を參考にしてゐる。林春はまた宜昌地區の第三期と大同小異の文化は長江流域巫山から涪陵あたりまで廣く擴がつてをり、また第一、二期に相當する遺物が廣漢中興公社、新繁水觀音、成都羊子山にあることに注意する。そして四川東部から宜昌地區が同一文化の擴がる地域を成し、當陽趙家湖、江陵紀南城の楚文化とは文化の内容に相違があると述べてゐる。このやうに成都盆地から揚子江流域の湖北省西部に、二里頭と二里頭平行期の文化の分布することが知られるに至り、四川と中原は文化的に懸け離れた地域でなくなつてゐるのである。

報告書(中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九八五)の圖のキヤプションに兩者は夫々 T9 ⑥:34, T1 ③:18 とあり、T9, T1 は

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

- トレンチの番號、⑥③は第六層、第三層の意と考へられるが、それらの層の伴出遺物は報告書では知られない。
- (34) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一一八頁。
林一九八二、圖版一二、中國社會科學院考古研究所二里頭隊一九八三、圖版一、戴一九七七、圖版四、4、5、林一九八二、圖52。
- (35) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一三〇頁。
例へばI式とされた中に報告書圖版一〇七、2中のごとき内や援の基部が特殊な形になつたものが含まれ、同じI式の中に彩版一七、1、一八、1のやうに切先の型式の異なつた類が含まれてゐる等。
- (36) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一七八頁。柄形飾と呼ばれてゐる。
林一九八二、三七—四〇頁。
- (37) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一七九頁。
同右、一二七—一二八頁。
- (38) 石一九八〇、下、圖版八八、3、一七七、9。
- (39) 安陽侯家莊一〇〇一號墓出土の類例(梁、高一九六二、圖版一二四、16、17)は斷片であるため資料にならない。
- (40) 林一九八二、圖55。
- (41) 他に安陽殷墟西區七〇一號墓の出土品(中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九七九、圖七二、4)は實測圖しか發表されてゐないが、これも同類と見られよう。
- (42) 中國社會科學院考古研究所陳列室に陳列。未公表。
- (43) 中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊一九八四、四〇頁。
- (44) 中國社會科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五、圖版三、10に發表された遺物。
- (45) 同右、二一五頁。
- (46) 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七六、二五九頁。
- (47) 同右、圖版一〇、3、4。
- (48) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一八七頁。
- (49) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一八七頁。

- (54) ジェニンスは(Jennyns 1951, p. 31) この器らしいと思はれるものの圖が『陶齋古玉圖』(五三葉)に出てあると言ふが、この圖には圓盤に小孔が四對あるやうに畫かれてゐる點に相違がある。これはまた別器である。
- (55) 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九八一、五一三—五一四頁。中國社會科學院考古研究所一九八〇、一二二—一二三頁。
- (56) 夏一九八四、圖三、9、四〇七頁に丹土村發見とされる牙飾付の有孔石斧を龍山文化のものとして使用してゐる。五蓮丹土村遺蹟採集の石器、土器は劉一九五八(二四—一九頁)に發表され、山東典型龍山文化のものとされてゐる(山東省文物考古研究所等一九八一、四二頁)。その年代を援用したものと考へられる。この遺蹟の文化が單一であることを知つてのことであらうか。
- (58) 廣東省博物館、曲江縣文化局、石峽發掘小組一九七八、一二頁。圖80の遺物は寸法が發表されてゐないが、一緒に寫眞に寫つてゐる小さい方の環が外徑三cm内外とすれば、この圖80の方は徑數cmといふことになるが、これよりも小型でこれとよく似た船形の突出部のついた所謂缺狀耳飾は臺灣の蘭嶼、火燒島、香港から古くより知られ(鹿野一九四六、國分一九八一、二九六頁、二九七頁2圖、9—11、三九六—三九八頁)。一九八〇年の臺灣、臺東附近の卑南遺蹟の發掘で卑南文化(前千年頃から約一五〇〇年間)に屬する石棺墓から突起のついた玉玦が多數發見されたが(宋一九八一、五頁、口繪)、これは突起が船形でなく乳頭形の類である。(金關恕氏の教示によつて知つた)。突起のついた所謂缺狀耳飾の系統についての議論(鹿野一九四六、黃一九七五、六三頁)もここに引いた龍山文化及びそれと大體同時期乃至少し晚い石峽文化の資料をも勘案して再検討を必要としよう。
- (60) 注(45)參照。
- (61) 杜一九八二、一七七頁。
- (62) 林一九八一、圖10。
- (63) 林一九八四a、五二—五四頁。
- (64) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一九三頁。なほ同様縁に八個ばかりの突起のついた圓盤狀のものが附いた器臺狀のよく似た器は陶齋舊藏品中に見出され、高一寸三分、濶三寸九分と記される(王大陸一九三六、一三二)。
- (65) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一九三頁。
- (66) 山東省文物管理處、濟南市博物館一九七四、一〇二頁。
- (67) 中國社會科學院考古研究所一九八四、一〇〇頁表。
- (68) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一一六頁。
- (69) 圖115のごとく圓筒形の四方に犧首を作りつける技法は良渚文化の琮の四方に鬼神面を上下に重ねて刻む方式と關係がありさうに一應考へられるが、良渚文化のものは同方向に作られ、問題の犧首は對蹠的に表はされる點で、大きな相違がある。
- (70) 中國社會科學院考古研究所一九八〇、一八五頁。
- (71) 同右、一八九頁。
- (72) 同右、一八七頁。
- (73) 同右、一八一頁。
- (74) 同右、一一六頁。
- (75) Loehr 1975, 172.
- (76) Loehr 1975 のこれらの器(172, 322)の解説にはこの點に觸れてゐない。一九八〇年にこのコレクションを一通り見たが、この點は見落した。
- 圖出所目錄
- 圖1 中國社會科學院考古研究所一九八〇、彩版三二、3
- 圖2 京都大學人文科學研究所(以下京大人文研と略稱)考古資料
- 圖3 林一九八四、圖63
- 圖4 Salmons 1938, Pl. 33, 2.
- 圖5 林一九八四、圖52

- 圖6 天津市藝術博物館一九八二、一七五
 圖7、(1) Salmony 1938, Pl. 33, 2より
 圖7、(2) 中國社會科學院考古研究所一九八二、四二より
 圖7、(3) 梅原一九五五、圖版四八より
 圖7、(4) Dohrenwend 1971, p. 5, 拓本より
 圖8 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八六、4
 圖9 夏一九八四、圖六
 圖10 『世界美術全集』1、原色版八
 圖11 夏一九八四、圖版二、1
 圖12 戴一九七七、圖版四、8、9
 圖13 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一二六、1、下
 圖14 山東省文物考古研究所等一九八一、圖九、3、4
 圖15 趙一九八四、圖二、1、2
 圖16 浙江省文物管理委員會一九五六、圖3
 圖17 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一二四、1
 圖18 同右、圖版一二二、2、下右
 圖19 山東省博物館一九七二、圖三
 圖20 南京博物院新沂工作組一九五六、圖一五
 圖21 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一四九、上、上1、下、中
 圖22 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九七九、圖七二、6
 圖23 京大人文研考古資料
 圖24 河南省文化局文物工作隊第一隊一九五八、圖九、1、2
 圖25 中國社會科學院考古研究所等東下馮考古隊一九八三、圖三〇
 圖26 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九八五、圖三二、7、10
 圖27 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八四、4
 圖28 京大人文研考古資料
 圖29上 中國社會科學院考古研究所一九八〇、彩版一七、2
 圖29下 同右、圖版七〇、4
 圖30上 同右、圖版一一、3

殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋

- 圖30下 同右、圖版七三、4
 圖31 同右、彩版一八、1
 圖32 同右、圖版一〇八、5
 圖33 同右、彩版一八、1
 圖34 同右、圖版一一〇、1
 圖35 湖北省博物館一九七六、圖版四、3
 圖36 同右、圖版四、4、5
 圖37 河南省文物研究所一九八三、圖三二、1、圖一九、3、4、8
 圖38 梁、高一九六二、下、圖版一〇八、1
 圖39上 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一一九、1、上
 圖39下 郭一九五一、圖版二三、3
 圖40上 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一一九、1、下
 圖40下 中國社會科學院考古研究所一九五六、圖版一五、8
 圖41 サックラー・コレクション寫眞
 圖42 中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊一九八四、圖版三、9
 圖43 中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊一九七六、圖版六、2
 圖44 鄭州市博物館一九六五、圖版四、1
 圖45右 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖一五七、2、左
 圖45左 同右、圖版一五六、2、左2
 圖46右 同右、圖版一五八、1、左2
 圖46左 同右、圖版一五九、2、右
 圖47 筆者圖
 圖47左 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一五七、2、左2
 圖48 同右、圖版一〇三、5
 圖49 同右、圖版一〇三、3、下
 圖50 同右、圖版一〇三、7
 圖51 同右、圖版一〇二、2、下
 圖52 同右、圖版一〇二、4、上、中
 圖53 同右、圖版一〇三、4

- 圖54 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一〇〇、3
圖55 Salmomy 1938, Pl. 21, 7.
圖56 河南文物工作隊第一隊一九五五、圖版一七、2
圖57 鄭州市博物館一九六五、圖版四、2
圖58 葛一九七二、圖九、2
圖59 石一九五四、圖版一七、4
圖60 Salmomy 1938, Pl. 29, 7.
圖61 Salmomy 1938, Pl. 30, 3.
圖62 中國社會科學院考古研究所一九八三、圖版一〇〇、4
圖63上 石一九八〇、圖版八八、5
圖63下 筆者圖
圖64 中國社會科學院考古研究所二里頭隊一九八三、圖版一、4
圖65 Loo 1950, Pl. 26, 6.
圖66 京大人文研究所古資料
圖67 ブランデージ・コレクション寫眞
圖68 フォッグ美術館寫眞
圖69 Hansford 1957, Pl. 60, B 26.
圖70 黃一九三九、二、一二オ
圖71 中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊一九八四、圖版四、一
圖72 フォッグ美術館寫眞
圖73 Loehr 1965, Pl. 19.
圖74 樋口隆康氏原板
圖75 中國社會科學院考古研究所一九八〇、彩版三七
圖76 プリテイシュ・ミュージアム寫眞
圖77 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九八一、圖二一、11
圖78 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版九三、2
圖79 山東省文物管理處等一九五九、一七
圖80 廣東省博物館・曲江縣文化局石峽發掘小組一九七八、圖一八
圖81 黃一九三九、二、三ウ
- 圖82 新中國出土文物、31
圖83 山東省博物館等東海發掘小組一九七六、圖二、1
圖84 臨沂文物組一九七五、圖八、14
圖85 昌濰地區文物管理組等一九八〇、圖三一、13
圖86 濰坊市藝術館等一九八四、圖七、4
圖87 同右、圖七、2
圖88 同右、圖版一、3
圖89 山東省文物管理處一九六〇、圖版三、6
圖90 施一九三八、圖版六、2
圖91 同右、圖版四、2
圖92 河南省博物館等一九七七、圖五五、4
圖93 同右、圖二六、2
圖94 同右、圖一四、3
圖95上、中 王立オンタリオ博物館寫眞
圖95下 同右拓本
圖96上 南京博物院、汪遼國一九八四、圖一九
圖96下 同、圖版三、8
圖97 プリテイシュ・ミュージアム寫眞
圖98 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一六四、2
圖99 同右、圖版一六五、5、右、圖版一六五、5、左
圖100 中國科學院考古研究所一九五九、圖版三四、1、同右、圖二五、左
列三
圖101 同右、圖版七八、1、同六一、右列一
圖102 中國社會科學院考古研究所一九八三、圖版五九、4、圖版五九、6
圖103 四川省博物館一九八一、圖二六、10
圖104 山東省博物館等一九七四、圖八七、4
圖105 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八三、2、圖七一、2
圖106 同右、圖版八二、3、圖七一、6
圖107 同右、彩版一六、2、圖七一、3

- 圖 108 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八二、2、圖七一、5
圖 109 同右、圖版八二、1、圖七一、4
圖 110 Salmony 1938, Pl. 33, 1.
圖 111 昌樂地區藝術館等一九七七、圖版二、3
圖 112 荷澤地區文物工作隊一九八〇、圖版一、6
圖 113 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖八、4
圖 114 山東省文物考古研究所等一九八一、圖二六、1、8
圖 115 梁、高一九六五、圖版二、1
圖 116 梁、高一九七〇、圖版五六、1
圖 117 中國社會科學院考古研究所一九八〇、彩版三七、2、圖九三、19
圖 118 同右、圖版一五四、3、圖九二、19
圖 119 黃一九三九、二、一〇ウ
圖 120 梅原一九五五、圖版四四、左
圖 121 黃一九三九、一、七ウ
圖 122 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一五四、1、左、圖九二、17
圖 123 同右、圖版一五四、5、左、圖九三、3
圖 124 同右、圖版一五五、3、左、圖九三、17
圖 125 同右、圖版一五五、3、右、圖九三、9
圖 126 同右、圖版一四九、下、右、圖九二、5
圖 127 同右、圖版一四九、下、左、圖九二、6
圖 128 同右、圖版一五二、6、左、圖九二、15
圖 129 同右、圖版一五二、6、右、圖九二、16
圖 130 同右、圖版一五五、1
圖 131 同右、圖版一五四、2、左、圖九三、2
圖 132 同右、圖版一五四、3、左、圖九三、5
圖 133 同右、圖版一五四、4、右、圖九三、4
圖 134 同右、圖版一五四、6、右、圖九三、15
圖 135 同右、圖版一五四、6、左、圖九三、18
圖 136 同右、圖版一五五、3、中、圖九三、8

殷墟婦好墓出土の玉簪若干に對する注釋

- 圖 137 同右、圖版一五五、4、中、圖九三、14
圖 138 同右、圖版一五二、3、中、圖九二、12
圖 139 同右、圖版一五二、3、左、圖九二、13
圖 140 同右、圖版一五五、5、右、圖九三、11
圖 141 同右、圖版一五五、5、中、圖九三、13
圖 142 同右、圖版一五五、5、左、圖九三、10
圖 143 同右、圖版一五二、5、左、圖九二、14
圖 144 同右、圖版八三、1、圖七一、1
圖 145 山東省文物管理處等一九七四、圖版九三、2、右、圖八五、3
圖 146 同右、圖版九一、圖八五、1
圖 147 梅原一九五五、圖版五二、2
圖 148 フォック美術館寫眞
圖 149 同右
圖 150 京大人文研考古資料
圖 151 山東省文物管理處一九七四、圖版九二、2、左、圖八七、3
圖 152 同右、圖版九三、1、圖八六
圖 153 中國科學院考古研究所山東工作隊等一九六五、圖四、11
圖 154 山東省文物管理處一九七四、圖版九二、1、圖八七、2
圖 155 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一五四、4、左、圖九二、18
圖 156 同右、圖版一五四、5、右、圖九三、6
圖 157 同右、圖版一五四、2、右、圖九三、1
圖 158 同右、彩版三七、2、左、圖九三、12
圖 159 同右、圖版一五五、5、右、圖九三、16
圖 160上1 同右、圖版一五〇、上1、右、圖九二、8
圖 160上2 同右、圖版一五〇、上2、右、圖九二、9
圖 160上3 同右、圖版一五〇、上2、左、圖九二、7
圖 160上4 同右、圖版一五〇、上3、左、圖九二、10
圖 161 同右、彩版三四、右
圖 162 ブランディジ・コレクション寫眞

- 圖163 ネルソン・アトキンス美術館寫真
圖164 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版一二、三、圖七三、6
圖165 同右、圖版一〇七、二、中、圖七三、1
挿圖1 石龍過江水庫指揮部文物工作隊一九五六、圖四

引用文獻目錄

日本文・中國文

- 「安陽殷墟五號基址談紀要」『考古』一九七七、五、三四一—三五〇
濰坊市藝術館、濰坊市寒亭區圖書館一九八四「山東濰縣獅子行遺址發掘簡報」『考古』一九八四、八、六七三—六八八頁
飯島武次一九八五『夏殷文化の考古學的研究』東京
尹煥章、趙青芳一九六三「淮陰地區考古調查」『考古』一九六三、一、一—八頁
梅原未治一九五五『支那古玉圖錄』京都
王家祐、江甸潮一九五八「四川新繁、廣漢古遺址調查記」『考古通訊』一九五八、八、二七一—三一頁
王大隆(編)一九三六『陶齋古玉圖』上海
河南省博物館、鄭州市博物館一九七七「鄭州商代城遺址發掘報告」『文物資料叢刊』一、一—四七頁
河南省文化局文物工作隊第一隊一九五八「鄭州旭畓王村遺址發掘報告」『考古學報』一九五八、三、四一—六二頁
河南省文物研究所一九八三「鄭州二七路新發現三座商墓」『文物』一九八三、三、六〇—七七頁
河南文物工作隊第一隊一九五五「鄭州市白家莊商代墓葬發掘報告」『文物參考資料』一九五五、一〇、二四—四二頁
河北省文化局文物工作隊一九六二「河北承德地區的古文化遺址調查」『考古』一九六二、一二、六四—六四三頁
夏鼐一九八四「所謂玉璫璽不會是天文儀器」『考古學報』一九八四、四、四〇—四一〇頁
- 荷澤地區文物工作隊一九八〇「山東曹縣辛家集遺址試掘簡報」『考古』一九八〇、五、三八五—三九〇頁
鹿野忠雄一九四六「東南亞細亞に於ける有角狀石輪」『東南亞細亞民族學史學研究』東京、二二七—二三四頁
郭寶鈞一九五二「一九五〇年春殷墟發掘報告」『中國考古學報』五、一—六一頁
葛今一九七二「涇陽高家堡西周墓葬發掘記」『文物』一九七二、七、五一—八
廣東省博物館、曲江縣文化局、石峽發掘小組一九七八「廣東曲江石峽墓葬發掘簡報」『文物』一九七八、七、一一—一五頁
吉發習、馬耀圻一九七九「內蒙古准格爾旗大口遺址的調查與試掘」『考古』一九七九、四、三〇八—三一九頁
故宮博物院一九七四「故宮博物院藏工藝品選」北京
高廣仁、邵望平一九八一「史前陶器初論」『考古學報』一九八一、四、四二—七—四五七七頁
江蘇省文物管理委員會一九五八「徐州高皇廟遺址清理簡報」『考古學報』一九五八、四、七一—八頁
湖北省博物館一九七六「一九六三年湖北黃陂盤龍城商代遺址的發掘」『文物』一九七六、一、四九—五九頁
黃士強一九七五「琰的研究」『國立臺灣大學考古人類學刊』三七・三八、四四—六八頁
黃濬一九三九『古玉圖錄初集』北京
國分直一九八一『臺灣考古民族誌』東京
山東省博物館、濟南市博物館一九七四「大汶口—新石器時代墓葬發掘報告」北京
山東省博物館一九七二「山東野店新石器時代墓葬遺址試掘簡報」『文物』一九七二、二、二五—三〇頁
山東省博物館・日照縣文化館東海峪發掘小組一九七六「一九七五年東海峪遺址的發掘」『考古』一九七六、六、三七八—三八二、三七七頁
山東省文物管理處一九六〇「山東日照兩城鎮遺址勘察紀要」『考古』一九

六〇、一〇一—一四頁

山東省文物管理處、濟南市博物館一九七四『大汶口、新石器時代墓葬發掘報告』北京

山東省文物管理處、山東省博物館一九五九『山東文物選集、普查部分』北京
山東省文物考古研究所、山東省博物館、中國社會科學院考古研究所山東隊、
山東省昌樂地區文物管理小組一九八一『山東姚官莊遺址發掘報告』『文物資料叢刊』五、一一八三頁

山東大學歷史系考古專業一九八〇『山東泗水尹家城第一次試掘』『考古』一九八〇、一、一一一—一七、三一頁

四川省博物館一九五九『四川省新繁縣水觀音遺址試掘簡報』『考古』一九五九、八、四〇四—四一〇頁

四川省博物館一九八一『巫山大溪遺址第三次發掘』『考古學報』一九八一、四、四六一—四九〇頁

四川省文物管理委員會一九五七『成都羊子山土臺遺址清理報告』『考古學報』一九五七、四、一七一—三一頁

四川大學歷史系考古學教研組一九六一『廣漢中興公社古遺址調查簡報』『文物』一九六一、一一、二二—二七頁

施昕更一九三八『良渚—杭縣第二區黑陶文化遺址初步報告』

昌樂地區藝術館、考古研究所山東隊一九七七『山東膠縣三里河遺址發掘簡報』『考古』一九七七、四、二六二—二六七頁

昌樂地區文物管理組、諸城縣博物館一九八〇『山東諸城呈子遺址發掘報告』『考古學報』一九八〇、三、三二九—三八四頁

『新中國出土文物』一九七二、北京

『世界美術全集』1、原始、一九五三、東京
西安半坡博物館一九八三『陝西神木石峁遺址調查試掘簡報』『史前研究』一九八三、二、九二—一〇〇頁

西南博物院籌備處一九五四『寶成鐵路建築工程中發現的文物簡介』『文物參考資料』一九五四、三、一〇—三四頁

石興邦一九五四『長安普渡村西周墓葬發掘記』『考古學報』八、一〇九—一

殷墟婦好墓出土的玉器若干に對する注釋

二六頁

石璋如一九七三『小屯、第一本、丙編、殷虛墓葬之三、南組墓葬附北組墓葬補遺』臺北

石璋如一九八〇『小屯、第一本、丙編、殷虛墓葬之五、丙區墓葬』臺北
石龍過江水庫指揮部文物工作隊一九五六『湖北北京山、天門考古發掘簡報』

『考古通訊』一九五六、三、一一—一二頁
浙江省文物管理委員會一九五六『錢塘江流域五個縣的幾處古遺址初步調查』

『文物參考資料』一九五六、八、二五—二八頁
宋文薰一九八一『卑南遺址的發掘』『大眾科學』七〇、一、一一—一五頁

戴應新一九七七『陝西神木石峁龍山文化遺址調查』『考古』一九七七、三、一五四—一五七、一七二頁

中國科學院考古研究所一九五六『輝縣發掘報告』北京
中國科學院考古研究所一九五九『廟底溝與三里橋』北京

中國科學院考古研究所山東工作隊、曲阜縣文物管理委員會一九六五『山東曲阜考古調查試掘簡報』『考古』一九六五、一二、五九九—六一三頁

中國科學院考古研究所內蒙古發掘隊一九六一『內蒙古赤峰藥王廟、夏家店遺址試掘簡報』『考古』一九六一、二、七七—八二頁

中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七六『偃師二里頭遺址新發現的銅器和玉器』『考古』一九七六、四、二五九—二六三頁

中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五『河南偃師二里頭遺址發掘簡報』『考古』一九六五、五、二一五—二二四頁

中國社會科學院考古研究所一九八〇『殷墟婦好墓』北京
中國社會科學院考古研究所一九八二『殷墟玉器』北京

中國社會科學院考古研究所一九八三『寶雞北首嶺』北京
中國社會科學院考古研究所一九八四『新中國考古發現與研究』北京

中國社會科學院考古研究所·中國歷史博物館·山西省文物工作委員會東下馮考古隊一九八三『山西夏縣東下馮龍山文化遺址』『考古學報』一九八三、一、五五—九一頁

中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九七九—一九六九—一九七七年殷

- 據西區墓葬發掘報告』『考古學報』一九七九、一、二七—一四六頁
- 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九八一「安陽小屯村北的兩座殷代墓」『考古學報』一九八一、四、四九—一五七頁
- 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊一九八五「一九七九年安陽后岡遺址發掘報告」『考古學報』一九八五、一、三三—八七頁
- 中國社會科學院考古研究所二里頭隊一九八三「一九八〇年秋河南偃師二里頭遺址發掘簡報」『考古』一九八三、三、一九九—二〇五、二一九頁
- 中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊一九八四「一九八一年河南偃師二里頭墓葬發掘簡報」『考古』一九八四、一、三七—四〇頁
- 趙朝洪一九八四「有關岳石文化的幾個問題」『考古與文物』一九八四、一、九二—九九頁
- 鄭州市博物館一九六五「鄭州市銘功路西側的兩座商代墓」『考古』一九六五、一〇、五〇〇—五〇六頁
- 天津市藝術博物館一九八二「天津市藝術博物館」東京
- 杜在忠一九八二「試論龍山文化的『蜚蜚陶』」『考古』一九八二、二、一七六—一八一頁
- 南京博物院、汪遵國一九八四「良渚文化『玉斂葬』述略」『文物』一九八四、二、二三—三六頁
- 南京博物院新沂工作組一九五六「新沂花廳村新石器時代遺址概況」『文物參考資料』一九五六、七、二—二六頁
- 林巳奈夫一九六三「殷周時代の幾何學的な紋様」、『二』、『東方學』二六、一一—一六頁
- 林巳奈夫一九七九「先殷式の玉器文化」『MUSEUM』三三四、四—一六頁
- 林巳奈夫一九八一「良渚文化の玉器若干をめぐって」『MUSEUM』三六〇、二—三三頁
- 林巳奈夫一九八二「中國古代の石版丁形玉器と骨鏹形玉器」『東方學報』五四、一一—一八頁
- 林巳奈夫一九八四「殷周時代青銅器の研究」東京
- 林巳奈夫一九八四a「所謂饕餮紋は何を表はしたのか—同時代資料によ

- る論證—」『東方學報』五六、一—一九七頁
- 馮漢驥、童恩正一九七九「記廣漢出土的玉石器」『文物』一九七九、二、三一—三七、三〇頁
- 俞偉超一九八〇「先楚與三苗文化的考古學推測—爲中國考古學會第二次年會而作—」『文物』一九八〇、一〇、一一—二頁
- 劉敦愿一九五八「山東五蓮、即墨縣兩處龍山文化遺址的調查」『考古通訊』一九五八、四、一四—二二頁
- 梁思永、高去尋一九六二「侯家莊、第二本、一〇〇一號大墓」臺北
- 梁思永、高去尋一九六五「侯家莊、第三本、一〇〇二號大墓」臺北
- 梁思永、高去尋一九七〇「侯家莊、第五本、一〇〇四號大墓」臺北
- 遼寧省博物館、旅順博物館一九八四「大連市郭家村新石器時代遺址」『考古學報』一九八四、三、二八七—三二八頁
- 林春「宜昌地區長江沿岸夏商時期的一支新文化類型」『江漢考古』一九八四、二、二九—三八、二二頁
- 臨沂文物組一九七五「山東臨沂大范莊新石器時代墓葬的發掘」『考古』一九七五、一、一三一—二四、二六頁

歐文

- Dohrenwend, D., 1971: *Chinese Archaic Jades in the Royal Ontario Museum*, Ontario.
- Hansford, S. H., 1957: *The Seligman Collection of Oriental Art*, Vol. I, London.
- Jennyns, S., 1951: *Chinese Archaic Jades in the British Museum*, London.
- Loehr, M., 1965: *Relics of Ancient China*, New York.
- Loehr, M., 1975: *Ancient Chinese Jades from Grenville L. Winthrop Collection in the Fogg Art Museum*, Harvard University, Cambridge.
- Loo, C. T., 1950: *An Exhibition of Chinese Archaic Jades*, New York.
- Salmony, A., 1938: *Carved Jade of Ancient China*, Berkeley